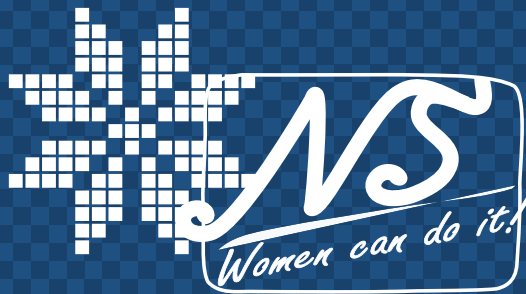




Kingdom of Norway Study Tour 2016 Report

# ノルウェー王国視察研修2016 報告書





---

## 未来につなぐ復興まちづくりにおける 女性リーダー育成・交流

---

東日本大震災から5年。

東北の未来につながる復興のまちづくりには、地域・企業・政治など、日常のあらゆる場面で女性が持てる力を十分に発揮し、意思決定に参画することが不可欠であり、その環境づくりや支援が重要です。

2016年1月、復興に向けてさまざまな分野でリーダーシップを発揮している女性6名が、ノルウェーを訪問しました。

男女平等先進国ノルウェーでは、女性の参画により決定された施策やまちづくりが、人々の生活にどのように活かされているのか。1970年代までは日本と同様に「男性は外で働き、女性は家事・育児をする」のが当たり前であった社会環境が、変容した要因は何だったのか。

これからのまちづくりに向けて、ノルウェーの知見をどう活かしていくかを考える機会となれば幸いです。

# 目次

東日本大震災復興のための女性リーダーシップ基金	02	
ノルウェー王国概要	03	
視察研修日程	04	
視察研修参加者	05	
東日本大震災体験プレゼンテーション	06	
▶ 視察報告		
ノルウェー王国視察研修2016報告 「未来につなぐ 復興まちづくりのキーワード」	08	
キーワード1:子ども・若者・女性の参画	10	
キーワード2:ネットワーク	15	
キーワード3:再チャレンジ	19	
COLUMN ノルウェー訪問記	25	
▶ 視察研修に参加して		
「復興まちづくりへのヒント～私たちができること」	28	
トロムソ市コーディネーター アンシャスティ・ヨンセンさんからのメッセージ	40	
スタバングル市コーディネーター 中 英公子さんからのメッセージ	42	
現地通訳 守口 恵子さんからのメッセージ	43	
▶ おわりに ノルウェー王国視察研修 最終年に寄せて		44
▶ 資料		
視察研修前後の活動	46	
用語解説	49	
関連新聞記事	50	

## 表紙写真

A	B	C	D
E	F	G	H
I	J	K	L
M	N	O	P

- A: ノルウェーの妖精トロール(オスロ市)
- B: オスロ市役所 ノーベル平和賞授与式会場
- C: 建設コンサルタント会社 asplan viak(トロムソ市)
- D: ブッケスプランゲ保育園(トロムソ市)
- E: スタバングル市街
- F: ブッケスプランゲ保育園(トロムソ市)
- G: 52の散歩道プロジェクト(スタバングル市)
- H: オスロ空港
- I: Church City Mission(オスロ市)
- J: 小野坂優子スタバングル大学准教授のレクチャー資料
- K: トロムソ市役所
- L: ガウセル小学校(スタバングル市)
- M: ランギンス市議会議員との懇談(トロムソ市)
- N: 現地通訳 守口さん宅での夕食(オスロ市)
- O: フログネル公園(オスロ市)
- P: 自転車のための電車車両(オスロ市)

## 裏表紙写真

- カールヨハン通り夜景(オスロ市)

# 東日本大震災復興のための 女性リーダーシップ基金

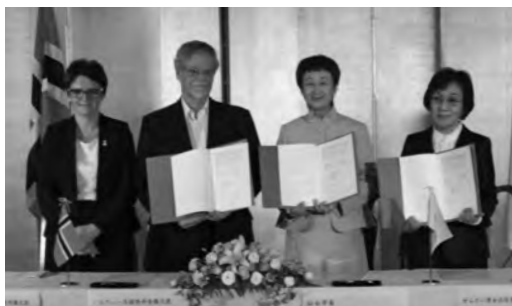
(ノルウェー基金)

本基金は、被災地の復興に携わる女性の人材育成を目的として、2012年11月、ノルウェー王国と仙台市、(公財)せんだい男女共同参画財団が協定を締結し、ノルウェー王国からの拠出金(約2,000万円)により設立されました。



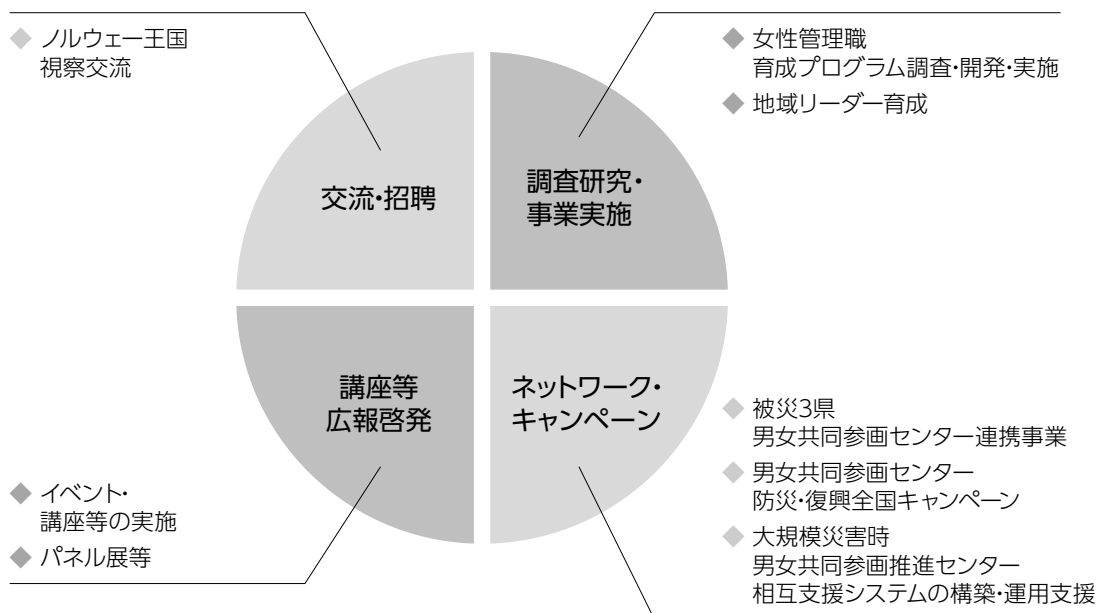
震災後、我が国は、ノルウェー王国から、「チーム・ノルウェー」として水産業や環境技術、再生可能エネルギーなどの分野でさまざまな復興支援をいただきましたが、この基金設立もその一環として行われたものです。

(公財)せんだい男女共同参画財団では、本基金により、地域における防災や復興の担い手となる女性の人材育成プログラムの実施や、全国的な女性のネットワーク構築に取り組んでいます。



協定調印式 2012年11月3日(於:エル・パーク仙台)

事業期間:2012年11月～2016年9月



# ノルウェー王国概要

ノルウェーは、ヨーロッパの北西部に位置し、スウェーデン、フィンランド、ロシアと国境を接しています。面積は日本とほぼ同じですが、人口はわずか520万人ほどの、山と森に囲まれた自然豊かな国です。

ノルウェーは、社会の豊かさや生活の質を測る「人間開発指数」(\*1)において、2009年から2014年まで6年連続で第1位を獲得しています。

また、男女の格差を測る「ジェンダー・ギャップ指数」(\*2)でも毎年上位となるなど、幅広い分野で男女平等が達成されている国としても知られています。

\*1 人間開発指数(HDI)…国連開発計画(UNDP)発表。「長寿で健康な生活」「知識」「人間らしい生活水準」という三つの側面から各国の人間開発の達成度を測るもの。2014年、日本は第17位(世界187か国中)。

\*2 ジェンダー・ギャップ指数(GGI)…世界経済フォーラム発表。「政治」「経済」「教育」「健康」の分野で男女の格差を測るもの。2015年、ノルウェーはアイスランドに続いて第2位、日本は第101位(世界145か国中)。



## 基本データ

- 国 名：ノルウェー王国 Kongeriket Norge  
(英語名Kingdom of Norway)
- 首 都：オスロ(Oslo)
- 総人口：5,205,434人(2015年10月1日現在)
- 面積：38.5万km<sup>2</sup>
- 元首：ハーラル5世国王 Harald V(1991年1月即位)
- 政 体：立憲君主制・議会制民主主義
- 公用語：ノルウェー語、サーメ語(多くの国民が英語を話す)
- 宗 教：キリスト教プロテスタント
- 平均寿命：女性84歳 男性80歳(2015年)
- 合計特殊出生率：1.73人(2015年)
- 通貨単位：ノルウェークローネ(略号NOK)

# 視察研修日程

月日	訪問都市名	時間	内容
2016年 1月24日(日)	移動日	12:30 16:05 18:05 19:20 21:45 23:35	成田空港発 コペンハーゲン空港着 コペンハーゲン空港発 オスロ空港着 オスロ空港発 トロムソ空港着
1月25日(月)	トロムソ市	8:30 11:00 12:30 14:30 18:00	保育園訪問 建設コンサルタント会社訪問 女性市議会執行役・女性市議会議員と懇談 DVクライシスセンター運営団体訪問 女性異業種交流会との懇談
1月26日(火)	トロムソ市 オスロ市	8:30 11:00 14:00 15:55	トロムソ市役所訪問 ▶森林保護の取組 【東日本大震災体験プレゼンテーション】 女性起業家との懇談 トロムソ空港発 オスロ空港着 オスロ市内見学
1月27日(水)	オスロ市	10:00 13:00 15:00 19:00	ノルウェー経営者連盟(NHO)訪問 ▶[Female Future Program]の概要説明 受講者との懇談 ノルウェー子ども・青少年・家族庁訪問 ▶男女平等・DV・人権問題等への取組の レクチャー・意見交換 オスロ市内見学(国立美術館) 現地通訳 守口さん宅へホームビジット
1月28日(木)	オスロ市 スタバングル市	9:30 10:00 14:35 15:30 17:30	外務省訪問 ▶エリーザベット・アスパーケルEEA・EU担当大臣表敬 オスロ市内見学(オスロ市庁舎) オスロ空港発 スタバングル空港着 小野坂優子スタバングル大学准教授レクチャー
1月29日(金)	スタバングル市	8:00 12:30 18:30	小学校訪問 ▶全校集会と4年生/7年生の授業見学 【東日本大震災体験プレゼンテーション】 スタバングル市役所訪問 ▶都市計画・遊歩道プロジェクトの説明 フィールドワーク 【東日本大震災体験プレゼンテーション】 フェアウェルディナー ▶視察研修の振り返り
1月30日(土)	移動日	9:50 11:00 15:45	スタバングル空港発 コペンハーゲン空港着 コペンハーゲン空港発
1月31日(日)	移動日	10:40	成田空港着

---

## 視察研修参加者

---

あいざわ まさこ  
相澤 雅子 (布の絵本づくりグループ「かざぐるま」代表)

さいともこ  
齋 知子 (岩沼市総務部総務課 技師)

すなけいこ  
砂子 啓子 (i-くさのねプロジェクト代表)

にへいあけみ  
二瓶 明美 (南蒲生町内会 復興部)

まのみか  
眞野 美加 (せんだい防災プロジェクトチーム)

みひら まさこ  
三平 真希子 (株式会社日本政策金融公庫仙台支店 国民生活事業 融資第四課 課長代理)

きす やえこ  
木須 八重子 (公益財団法人せんだい男女共同参画財団 理事長)

やはた えつこ  
八幡 悦子 (公益財団法人せんだい男女共同参画財団 理事)

わたなべ ひろみ  
渡邊 ひろみ (公益財団法人せんだい男女共同参画財団 エル・ソーラ仙台 管理事業課長)

なりた ひろみ  
成田 洋美 (公益財団法人せんだい男女共同参画財団 エル・ソーラ仙台 相談支援課 相談支援係長)

2016年1月現在



---

# 東日本大震災体験プレゼンテーション

---

東日本大震災の体験や震災からの復興の様子を報告しました。



トロムソ市役所



ガウセル小学校(スタバングル市)



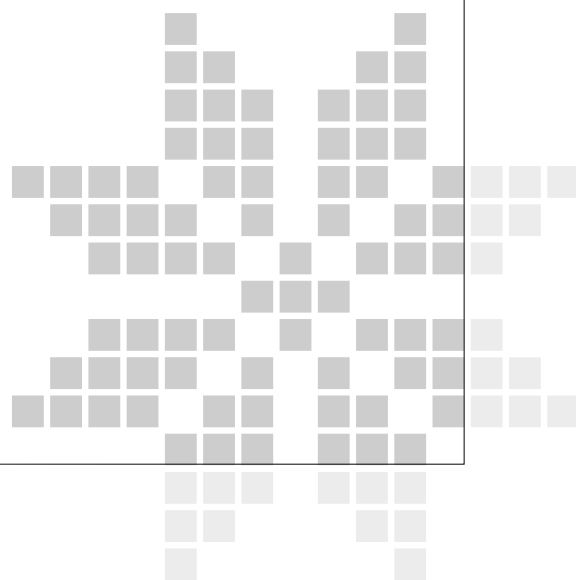
スタバングル市役所







# 視察報告



# ノルウェー王国視察研修2016報告

## 「未来につなぐ 復興まちづくりのキーワード」

日 時：2016年4月23日(土)

会 場：エル・ソーラ仙台 大研修室

報告者：ノルウェー王国視察研修2016参加者

相澤 雅子、齋 知子、砂子 啓子、二瓶 明美、眞野 美加、三平 真希子  
八幡 悦子、渡邊 ひろみ、成田 洋美(進行)

**成田** 私たちは、今年1月24日から31日、ノルウェー王国視察研修に行ってきました。

初めに、ノルウェーとはどのような国なのか、私たちはどのような視察研修プログラムを行ってきたのか、簡単にお話しします。

### ノルウェー王国視察研修2016の概要

私たちが訪問したノルウェー王国は、ヨーロッパの北西部スカンジナビア半島にあり、日本からは、飛行機で約14時間かかります。日本と同じように南北に細長い国です。

面積は日本とほぼ同じですが、人口は520万人ほどの、山と森に囲まれた自然が豊かな国です。

#### 男女平等先進国ノルウェー

ノルウェーは、世界でも有数の「男女平等の先進国」です。

世界経済フォーラムが毎年発表している男女平等度ランキングでは、ノルウェーは、145か国中2位となっています。このランキングは、政治、経済、



国会議事堂(オスロ市)

教育、健康の4つの分野で男女の格差がどれくらいあるのかを調べるもので、女性の社会進出が進み、政治の分野でも女性が活躍しているノルウェーは大変高い順位です。

一方、日本は101位です。ここ数年100位前後で推移しているというのが現状です。

#### 主な視察研修先

このようなノルウェーで、3都市を巡り視察研修に行ってきました。

初めに訪れたトロムソは、北極圏に位置し、オーロラ鑑賞ができることで有名な、人口6万人程の地方都市です。

私たちが伺った時期は、午後3時頃から午前11時頃まで太陽が沈み、夜が大変長い時期だったのですが、例年よりも暖かく、残念ながらオーロラに出会うことはできませんでした。

トロムソでは、女性異業種ネットワークの力をお借りし、訪問先をコーディネートしました。トロムソ市役所ではまちづくりのお話を聞き、トロ

### 男女平等の先進国ノルウェー

男女平等度ランキング

145か国中 第2位

(世界経済フォーラム発表 ジェンダー・ギャップ指数2015年)

政治、経済、教育、健康の分野で男女の格差がどれくらいあるかをはかったもの

日本：101位

ムソ市議会執行役の方のお話にはとても力をいただきました。また、建築コンサルタント会社や保育園、DV\*被害者支援団体も訪問しました。これらの訪問先すべてに、女性異業種ネットワークのメンバーにキーパーソンとして入っていただいていたからこそ実現したすばらしい内容でした。

次に訪れたのは、オスロです。オスロは人口62万人のノルウェーの首都です。オスロでは、企業の女性役員候補育成プログラム「Female Future Program」の修了生で、今は大手IT企業役員の女性とお会いすることができました。また、DVや障がい者などあらゆる差別の撤廃に向けて取り組んでいる国の機関「子ども・青少年・家族庁」を訪問したほか、外務省にてアスパーケルEEA・EU担当大臣を表敬訪問し、震災復興に対するノルウェーからの支援についてお礼を申し上げることができました。

最後は、さらに南に向かい、人口12万人の地方都市、スタバングルを訪れました。

スタバングルでも、市役所でまちづくりについて話を伺うことができました。また、小学校での人権教育の見学や、スタバングル大学で教鞭をとっている小野坂さんの男女平等に関するセミナーも受けることができました。

また、私たちは、3都市を訪問するなかで、東日本大



スタバングル市内のマーケットにて

震災の体験やそこからの復興の様子について、市役所や小学校でお話させていただく機会を設け、まちづくりの担当の方や小学生たちに伝えることができました。

3都市を巡るというハードスケジュールでしたが、それぞれの地域で活躍しているたくさんの女性たちにお会いし、懇談することができました。

### 報告のテーマ

ノルウェー王国で「男女平等」がとても進んでいる、そういった結果や成果を導いてきた過程には、それを推し進めるための戦略がありました。その戦略は、どの分野にも共通してあり、人々の暮らしの中に根付いているということも実感してきました。

今日は、これからの復興まちづくりのヒントになる共通の戦略について、3つのキーワードでお伝えし、会場の皆様と、これからの暮らしや復興について考えたいと思います。

## 3つのキーワード

1. 子ども・若者・女性の参画
2. ネットワーク
3. 再チャレンジ

# キーワード1:子ども・若者・女性の参画

**成田** 一つ目のキーワードは、「子ども・若者・女性の参画」です。日本でも今年の夏の参院選から選挙権年齢が18歳以上に引き下げられ、若者の政治参画に関心が寄せられていますが、まだまだ若者にとって「政治」は遠いイメージがあるのではないのでしょうか。

ノルウェーには、女性はもちろん、若者、そして子どもが、政治やまちづくりに参画しやすい仕組みがありました。

齋さん、トロムソやスタバングルの市役所での「まちづくり」への市民の参画についてご紹介ください。

**齋** まちづくりのハード面に携わる人、つまり技術者や市役所の職員に女性が多いというのが第一印象です。トロムソでは、コーディネートしてくださったアンシャスティさんの勤務する建設コンサルタント会社を訪問し、スタッフと懇談しました。そこで、「男性は細かいことにとらわれず、一方、女性は柔軟性を備えている。違いを認め合い、長所を活かすことで技術が融合する」という男性スタッフの言葉が心に残りました。

日本では男性社会とされる建築・土木業ですが、ノルウェーでは技術者の割合が男女半々です。その理由として、働き方の違いがあげられます。日本では長時間労働が当たり前の業界ですが、ノルウェーでは職種や男女を問わず、定時で仕事を終えることが当たり前であり、家族と過ごす時間をとても大事にしていました。男女平等とは、一人ひとりの仕事とプライベートとのバランスがとれていて、そこに男女の差がないことです。日本では母親を支援する施策として、待機児童問題への



対応などばかりが目されますが、本来見直すべきは父親の働き方、育児参加なのかもしれません。

続いて、トロムソ、スタバングルの2都市で市役所の方から都市計画について、お話を聞きました。極寒でオンシーズンが短い印象のノルウェーですが、「野外活動と自然に親しむ体験を通じた国民の健康増進」という国家目標があり、トロムソ、スタバングルの両都市とも、市民の健康づくりやアウトドアライフの推進をビジョンに、都市計画を行っています。公園や遊歩道は、かつての農地や森に最小限の整備を施したもので、整備コストを抑えるだけでなく、従来の景観や生態系の維持など、環境に配慮した計画です。いわゆる日本の都市公園とは性質の異なるもので、子どもたちは豊かな自然の中から、遊びを作り出し、危険や自然との共存について学ぶそうです。

また、緑地を利用したまちづくりは、市域の一部ではなく、都市全体をネットワーク化して形成されており、そのような都市計画決定で必要となるのが、官民の協働です。行政が策定したマスタープランを基に、どのような手法で市民の声を集めるのか尋ねたところ、計画の公表はホームページや新聞掲載などのメディアを使用し、意見収集は公募やワークショップの他、ツイッターなどの



スタバングルス市役所

SNSを使用しているということでした。男女や年代に偏りがない意見収集ができるよう、活用するツールの幅が広いことに驚きます。

また、日本では、子育ての視点から、母親が子どもの代弁をしますが、ノルウェーでは子どもの声を拾い、反映させることもあるそうです。市民との対話や解決に時間を費やすことによって、計画の進捗が遅くなるデメリットはありますが、たくさんの人を巻き込むからこそ、住民に当事者意識が生まれ、地域への愛着がプライベートスペースのメンテナンスやボランティアによる管理に繋がるなど、官民の協力によって持続的なまちづくりが行われてきました。



52の散歩道プロジェクト(スタバンゲル市)

私を含め行政は、市民が政策に興味を持ち、参加しやすい仕組みをつくっていかねばなりませんし、個人個人は子どもたちの未来へ向けたまちづくりに責任を持たなければならないと強く実感しました。

**三平** 私からも一つ、女性・若者の参画について感じたことがありますので、紹介させていただきます。齋さんのお話にありました、建設コンサルタント会社を訪問させていただいたときのことで、女性が多く活躍するこの企業は、社内の雰囲気

気が明るくて、皆さん生き活きと働いていましたし、近年では連続して利益を計上しているそうです。私は金融機関に勤めておりますので、この企業のどのようなことが、利益計上、黒字につながっているのか気になりました。その秘訣としては、社員一人ひとりの意見を聞いて、それぞれの良いアイデアを経営に取り入れていくということでした。例えば、道路建設の時に、男性社員はいかにコストを安く抑えるかということを考えていたそうです。そのとき女性社員は、街の景観に合わせた美しい道路にしたいと考えていたそうです。結局両者の良いところを取り入れたことにより、安く美しく仕上げることができて、依頼者に非常に喜ばれたということです。日本でも、働く人々の価値観が多様化していますし、消費者ニーズの多様化も進んでいます。社員全員が、持っている能力と可能性をフルに発揮して貢献できるように、女性ならではの視点、若者ならではの独創的な意見を取り入れて、経営に活かしていくことが、企業・組織を強くしていくと思いました。



建設コンサルタント会社 asplan viak (トロムソ市)

**成田** 多様性を認め、活かす社会の根本には、幼少期からの教育があると思いますが、私たちは保育園と小学校を訪れましたのでご紹介します。

**相澤** 訪問したトロムソの保育園は、自然に囲まれた壮大な景観の敷地にありました。雪の積もったとても寒い日でしたが、子どもたちは外でのびのびと元気に遊んでおり、とても楽しそうな様子が伝わってきました。

ノルウェーの保育園について、三つのことをお話しします。

一つ目は、「子どもたちの保育環境について」です。「自然の中で遊びながら学ぶことを大事にしている。」と園長先生がお話しされていました。みんなで使うテントラボや、そり、スキーを用意するなど、子どもたちが楽しめる工夫がなされていました。外遊びを推進することで、自然にふれながら様々なことを感じたり、学んだりすることができます。部屋の中からは、一面の海が見えました。時には、クジラも見られるそうです。自然の美しさを感じました。

保育園の部屋の中には、作業台や椅子などの様々なものが大人にも子どもにも使いやすく設置されていました。

また、給食は、なるべく地産地消にこだわり、体のことを考え、手作りで行っているそうです。自然を生かした環境の中での保育、また、子どもたちの成長を第一に考えた環境が整っており、とても素晴らしいと感じました。

二つ目は、「個性を大切にした保育」です。男女同じプログラムで保育を行っているそうです。一

人ひとりが違うことを理解し、尊重することが大切であるという話があり、日本の教育においてもとても大切なことだと感じました。ままごとやものづくり、科学的な遊びなどの様々な体験を通して、男女平等の価値観を育んだり、人権の大切さを教えたりしているのだそうです。小さな頃からこのような考えを学ぶことで、互いを認め合うことの大切さを自然と身につけることができるのは、とても素敵なことだと感じました。

三つ目は、「保育園の運営体制」についてです。ノルウェーの子どもは、移民を含めて、すべての子どもが保育園に入る権利が保障されており、待機児童はいません。保育料は、自己負担が15%で、あとの85%は、国が負担しているそうです。日本に比べ、保育環境が十分に保障されていると感じました。

訪問した園の職員の男女比は半々でした。いろいろなタイプの先生がいることで、子どもたちが活発になったりする良さがあるということでした。また、保育士だけでなく専門資格を持った人が職員として配置され、工作・大工・技術者・教育学など様々な分野について学んでいました。専門の知識を



ブックスプランゲ保育園(トロムソ市)



活かした保育を行うことができる良さがあり、子どもたちにとって恵まれた環境であると感じました。

**齋** スタバングルでは小学校を訪問し、全校集会や授業を見学したり、休み時間を児童と一緒に過ごすなど、先生方との懇談も含めて、半日にわたってノルウェーの教育について学びました。印象に残るのは大きく二つです。

一つ目は、休み時間の過ごし方です。学校独自のルールがあって、業間休み時間は、天候にかかわらず全校児童が外で過ごします。わたしたちが訪問した日は、風も雨も強く、最悪の天気でしたが、子どもたちはそれをものともせず、校庭の山や遊び道具を使って、元気に遊んでいました。自然から擁護するのではなく、服装や装備で十分な対策をしたうえで、自然から学び、自然と共生する環境教育が学校で行われています。

見学をしていると、オレンジ色のビブスを着た子どもたちが目を引きました。先生に伺うと、仲良しリーダーという高学年の児童で、小さい子に遊びを教えたり、時にはケンカの仲裁をするなど、楽しく、安全に休み時間が過ごせるよう、見守る役目を担っているそうです。仲良しリーダーになると自分は自由に遊べないにもかかわらず、リーダーになりたい児童はととても多いそうで、子どもに役割を与えることで、それが自立と責任感につながるのだと先生はおっしゃっていました。

二つ目は、4年生のディベートの素晴らしい授業です。討論のテーマは、弁当派か給食派かというものでした。ノルウェーの小学校ではお弁当が一般的ですが、最近はお弁当を持たせることができない、貧しい移民が増えているという事情もあり、給食を導入すべきではないかという議論が政治的に検討されているのだそうです。グループに分かれ、それぞれの課題が決まると、まとめ役をするリーダーの選出を行うのですが、「リーダーをやりた

い人は手を挙げて」という先生に対して、挙げられた手の数に驚きました。クラスの半数、いや、ほとんどの児童が手を挙げています。リーダーが決して特別な存在ではなく、皆それぞれが主体性をもっていることに感心せずにはられません。

討論の方法について、先生は「相手のグループを説得するだけじゃなく、相手の方がいいのではないかということも考えるんだよ」と指導していました。話し合いでは、よく大人を観察しているなぁと感心するような意見や、脱線したまま収集がつかないなど、リーダーを進行役に、子どもらしい意見が交わされます。おとなしくてなかなか自分の意見を言い出せない子もいたのですが、リーダーに対して先生が適度な助言を与え、グループ皆の意見を引き出していました。最後にリーダーが話し合いの結果を発表し、先生は「大変いい意見だ」と褒めたあと、「いろいろな意見を聞いて対話することが大きな対立を解決することにつながる」と講評していました。つまり、相手を言い負かしたり、結論を導き出す授業ではなく、自分の意見を持つこと、相手の考えを聞き、それをまた自分で考えること、対話することの意義が小さな頃から教えられているのです。

小学校の訪問は最終日の行程でしたが、研修の中で何度となく「平等や人権」、「自然との共生」などの言葉を耳にする中で、それが身につく根底となるものは、まさに幼児期からの教育であると、そこで腑に落ちました。家庭でも学校でも、子どもが自分の意見を持つことや自立を促すこと、そして対話することが、平等社会を循環させる一歩なのだと思います。

**成田** 相澤さん、齋さんありがとうございました。

八幡さんは、デートDV\*防止の啓発のため、中学生や高校生などと交流があると思いますが、小学校を訪問して、今後に活かしたいことはありますか。



**八幡** 私は、DV\*や性暴力の防止活動や、子どもたちへの性教育をしているので、シェルターの見学等にも興味があったのですが、なんとっても、保育園・小学校の訪問が一番ワクワクしました。

保育園では、大学を出て学士号を取った方が、子どもたちに歴史を教えたり、科学の実験のようなことをしており、それに見合う年収があるということでした。また、先住民の文化についても教育していました。

小学校では、休憩時間に子どもたちが踊ったり、手遊びをしたりしている様子を見学し、世界中の子どもの遊びは同じなんだな、と感じました。仙台市では性暴力防止の啓発および被害者の早期発見に向けて、15年間継続して小学1年生全員にパンフレットを配布しています。ノルウェーの子どもたちの様子を見て、日本に戻ったら、世界共通である踊りや手遊びを使うなど、子どもに伝える手法について工夫しようと考え、先生方にお話ししてきました。

それから、小学校のディベート教育は素晴らしかったです。「対話することで、戦争や抗争は防げる」と教えていました。授業では、子どもたちがだんだんエキサイトして、給食を作るコックのストレスの話へと論点がずれていき、「コックは仕事だろ」と生徒の一人がきつい言葉で発言しました。すると先生が「そういう乱暴な言葉ではなくて、相手を尊重する言葉で語らなきゃいけないだよ」

と言いました。こういうことについて、小さいときから丁寧に教育を受けていることに感心しました。

それから、オレンジ色のビブスを着けた仲良しリーダーは選挙で選ばれます。任期は半年間で、いじめ監視ではなく、仲良しリーダーとして、ひとりぼっちでいる子はいないか、気を配っていました。これに選ばれるということはとても名誉なことなのだそうで、誇りを持って活動していることが素晴らしいと思いました。また、新入生には、一人ひとりに担当の上級生がついていました。

踊りの練習をしている仲良しリーダーたちもいました。多分、DVDを観て踊りを覚え、子どもたちに教える役なのだと思います。その踊りの曲もかっこよかったですね。

それから、仲良しリーダーの子どもたちが、自分たちの絵を描いて、ビニールコーティングしてプレゼントしてくれました。

小学校ではみぞれが降る中で子どもたちが岩場で遊んでいたりと、保育園では暖房のない木造の小屋でベビーカーの中の赤ちゃんが昼寝していたりと、小さいときからの鍛え方と、人と話し合うという、教育の神髄を見ることができて、感動しました。

**成田** 子どもたちは、ノルウェー社会の一員であり、学校運営にもしっかりと参画し、大人になってからはまちづくりにも参画していくという、そんな様子をこの場を通して実感することができました。



ガウセル小学校(スタバングル市)



子どもたちからプレゼントされた絵

## キーワード2:ネットワーク

**成田** 二つ目のキーワード、「ネットワーク」についてお伝えしたいと思います。トロムソ市の訪問先のコーディネーターは、女性異業種交流会の力が大きかったと、先ほどの視察内容でもお伝えしました。インスピラについて、三平さんからお話しください。

**三平** 今回の視察では、様々な種類のネットワークを視察してきました。そのうちの一つ、インスピラは、様々な業種の女性が集まって意見交換などをする会です。集まりは定期的に行っており、意見交換会以外にも、外部から講師を招いて話を聞くこともあれば、持ち回りで講師を務めたり、文化関係のイベントを主催することもあるそうです。私たちは今回、メンバーのご厚意によりご自宅でノルウェーの家庭料理をいただきながら意見交換を行ったのですが、その料理はどれもおいしくて、雰囲気もアットホームで、とても居心地のよい女子会でした。しかし、その雰囲気とは対照的に、彼女たちがつくるネットワークは、実はとても戦略的であるということを感じたのでご紹介します。

インスピラは現在35名のメンバーで活動を行っており、建築士・生物の博士・警察官・法律の専門家・企業の管理職など、あえて違う分野で働く多様な背景を持つ方々で構成されています。メンバーは多ければよいというわけではなく、今いるメンバーの中で、自分たちに不足している分野、補いたい分野は何かということを考えて募集しているそうです。多様なメンバーが集まることによって、限られた時間で効率よく、たくさんのことを学ぶことができる、また、魅力ある人たちとのネットワー



クを構築することにより、意識を高めていくことができる貴重な場であるということ教えていただきました。

日本でネットワークというと、職場内や同じ趣味など、共通点の多い人たちで絞られたカテゴリーの情報共有を行う印象がありますが、ノルウェーでは、あえて背景が違うメンバーで集まるからこそ、より強力なネットワークになるとおっしゃっていたことが印象的でした。

ネットワークを構築すれば、すぐに結果が出るとは必ずしも言えないかもしれませんが、長期的スパンで考えた時に、自分に異分野のネットワークがあることは心強いと思いますし、強みにもなると思いました。仙台には、このような異業種のネットワークの場は少ないと思いますので、「インスピラ仙台」のような会をつくっていただけると感じました。

また、トロムソ市議会執行役の、クリスティン議員のお話を伺ったときにも、ネットワークの重要性を感じた場面がありましたので、ご紹介します。

クリスティン議員は25年間政治に関わっておられ、トロムソ市議会のトップです。トロムソ市議会では、女性の市議会議員の人数が半数を超えているそうです。ノルウェー王国の都市の中でも、前例のない快挙だと聞いて、ノルウェーの男女平等社会の最前線をいく市議会だと思いました。そんなトロムソ市議会も40年前は、日本と同じように性別役割分担意識が強くあったそうで、女性リーダーを一人増やすにも苦労したとのこと。クリスティン議員自身も、執行役になるまでは、チャレンジの連続だったそうですし、次世代の女性リーダーを育てる意味でも、様々な工夫があったと伺ってきました。その中で、どんなふうにしてノルウェーが男女平等、女性の活躍を進めていったのか。や

は、大切なのは女性同士のネットワークだったとのこと。特に印象的だったのは、必ずしも同じ意見の人同士でなければ仲間として組めないわけではない。大きな方向性・目的が同じであれば、互いにサポートするという事です。初めて女性リーダーになる人は、様々な試練があって、それを乗り越えていく必要があります。もしも、その女性リーダーと多少意見が合わなくとも、良いところを認めて足りない部分をサポートしていく。その結果、彼女はリーダーとして成長してロールモデルになり、さらに多くの後輩がリーダーになりたいと思い、最終的に女性リーダーが増えていったということでした。

ノルウェーでは、男女平等という大きな目標達成に向けて、ネットワークのあり方が常に進化しており、非常に戦略的であると感じましたし、ネットワークがあることが女性たちにとって非常に力になるということをお教えいただきました。

**渡邊** ネットワークの大切さについては、日本の経団連にあたるノルウェー経営者連盟(NHO)が実施しているFemale Future Programの修了生との懇談でも聞かれましたので、ご紹介します。

ノルウェーでは2003年の会社法の改正で、従業員の男女比において、どちらかの性が40%を下回らないようにすることが、罰則付きで定められました。そこで、女性役員候補者を育成するために作られたのが、Female Future Programです。このプログラムの修了生の6割が、役員や管理職に登用されているということで、非常に成果を上げているプログラムです。

このプログラムの修了生で、ラクシュミさんという方のお話を伺うことができました。このラクシュミさんは、ノルウェーで一番大きなIT企業「EVRY」社で働いていて、プログラムの受講後にシニアプレジデントになられたそうです。「受講



ノルウェー経営者連盟(NHO) (オスロ市)

して一番良かったと思うことは何ですか?」と伺ったところ、「ともに学んだ志の高い女性たちのネットワークを得たこと」という答えが返ってきました。

プログラム終了後も、ネットワークの女性たちのサポートで、自分の考えを深め、視野を広げることができる、それによって、自分は、より良い決断を下すことができるのだということです。そのようにして導き出した解決策は、従来の解決策よりずっと優れたものであると断言していました。

私ども財団では、このFemale Future Programを参考にして、女性管理職候補を育成する「仙台女性リーダー・トレーニング・プログラム」を昨年度から実施しており、昨年度、受講いただいた皆さんでネットワークが結成されています。

今回の派遣研修で、このネットワークの重要性を再認識するとともに、ネットワークの持つ意味やあり方について改めて考えることができました。

**成田** ありがとうございます。

インスピラのメンバーのみなさんも、クリスティン議員のお話も、さらにはラクシュミさんのお話からも、自分たちがネットワークに貢献するからこそ、ネットワークに支えられているという自覚、

役割と責任を持っていることがとても印象的でした。



Female Future Program修了生との懇談(オスロ市)

それでは、「戦略的にネットワークを使っていく」という言葉が出てきましたけれども、実際にネットワークを活用していくというのはどんなイメージなのか、これからの私たちの活動にヒントになることについて、二瓶さんにお話ししたいと思っています。

**二瓶** 私はネットワークという言葉聞いて、「つながり」だと思いました。トロムソでは、様々な女性リーダー…企業管理職・起業家・市議会議員・市役所まちづくり担当課の管理職・DV\*被害者支援団体・保育園を訪れたのですが、それぞれの訪問先に



インスピラのメンバーがいらっやったのです。インスピラのネットワークで実現したこのトロムソ視察がとても素晴らしくて、感動しました。

私は東日本大震災で被災後、現地再建をしてま

ちづくりをしているのですが、震災の経験をとおして知り合えた方々とのつながりを活かしていきたいと思います。今は私だけがつながっているのですが、これからは、まちづくりのメンバーも一緒につながって、もっと強いネットワークを作って、これからのまちづくりに関わっていただけると、強く思いました。

**成田** ありがとうございます。

ここまでは、人々が力を十二分に発揮して大きな成果を出すために、ネットワークはとても重要であるというお話でしたが、一方で、弱者の人権を守るためにもネットワークは必要であるという話もノルウェーで伺ってきました。

ノルウェーのDV\*被害者の状況について、八幡さんからお話しください。

**八幡** 「Church City Mission(街の伝導団)」を訪問してきました。ホームレスや障がいを持つ人、外国人で問題を抱えた人、難民としてノルウェーに来た人、子連れの難民の人、心に怒りがいっぱいの人など、現在70~80人が利用していることでした。ここにはチャペルという祈りの場が用意されており、キリスト教でなくてもあらゆる宗教の方を受け入れているということでした。

活動は、かなりの部分が教会の皆さんたちの慈善活動です。300人程度の方がボランティア登録をしていますが、男性が仲間に入るのは難しく、そのほとんどが大人の女性だそうです。ですから、夜8時でスーパーでのお酒の販売が終了する国ではあるのですが、週末のパーティーなど、夜中のパトロールも女性たちが行っています。

それから、貧困家庭…主に移民の人や、薬物乱用の人家族支援として、映画やプールやハイキングなど、夏休みのイベントをアレンジしたり、経済的に厳しい人にゆとりをもたせたり。また、若者たちを巻き込むために、バレンタインも取り



Church City Mission (トロムソ市)

入れています。

起業した女性たちのお店が並ぶバター市場には伝導団のバザーがあり、女性たちが編んでくれた靴下やアンティークなものを売っていました。売上金が伝導団の運営費に充てられているそうです。そのバザーでレジを打っていたのは、移民の方でした。

活動例として、私たちが訪問した日は、午前9時に路上生活者の方にお食事としてオートミールの提供、麻薬常習者の集まり、移民の方向けのノルウェー語の講座を実施したということでした。移民の女性対象に、民主主義の教育講座を実施していて、女性に権利があることを教えているそうです。

電話相談は年に7,500件あります。日照時間が少ない時期にはうつ病から薬物依存になってしまう方も少なくないということです。社会的に疎外されている人々の意見を代弁することもしています。

DVクライシスセンターはノルウェーで40施設あるそうです。そのうち半数程度が、教会関係のセンターで、あとの半分はNPOが設立したものだそうです。当初はボランティアでの運営だったのですが、2010年に法律ができてから、運営費を

国が負担することとなったので、仕事としてやっていけるようになったそうです。

また、離婚した場合の養育費は、給料から天引きです。日本では、支払われなかった場合に強制執行をかけて、ようやく給与天引きになります。

仕事に就いていない女性がDV\*に遭うことが多いです。自立していないから依存しなければならないとも言えますが、DVがあるから仕事に就けないとも言えます。

DV被害者の半数ぐらいが移民の方です。3年居住していれば、離婚して子どもがいなくても定住権がもらえるということがすごいなと思いました。日本では子どもがいないと定住権を得るのは厳しいです。



Church City Mission (トロムソ市)

**成田** 移民女性が孤立してしまわないように、ノルウェーの文化・民主主義を教えることで、ネットワークにつなげていく、ということがとても印象的でした。

## キーワード3:再チャレンジ

**成田** 最後のキーワードは「再チャレンジ」です。視察を通してこのテーマで感じたこと、皆さんに伝えたいことについて、眞野さん、お話しいただけますか。

**眞野** 私は、「再チャレンジ」というキーワードを持ってノルウェー視察研修に臨みました。それは、生きづらさを抱えたまま一生を終わると、私としては首をかしげたくなる出来事に多々遭遇してきたことが背景にあり、ノルウェーではどうなのかを見てようと考えたからです。



そもそも、再チャレンジをするということは、どこかでルールを外れたり脱落をしてしまうことが前提となっているように思います。しかし、ノルウェーでは、そのようなこと自体が無いのではないかと強く感じました。

ここまでの話にもありましたように、ノルウェーは、多様性を受け入れる、一人ひとり違って当たり前だし、個々が対話をして互いを磨き合う風土があります。それによって、自己肯定感を高め、自分は必要な人間なのだと思う、個人個人が自信をもって自己決定をしていける社会なのだと思います。日本では、例えば非正規雇用や奨学金の問題など若者が抱える問題や、同時期に子育てと介護を担うという状況もあり、そのような中で、経済的不安というものが、一番自信を無くしてしまう原因になるのではないかと思います。これに対してノルウェーは、例えば、先ほど八幡さんからのお話でも出ましたが、離婚をした場合の養育費の支払いが滞ることもなかったり、大学まで学費が無料だということで、経済的不安が少ない国のようでした。このような点から考えると、日本

においては再チャレンジというよりも、チャレンジをし続けることができる環境が、まだまだ足りないのだと、とても悲しく実感してきました。

それから、経済的不安とは少し離れるのですが、2011年、私たちが東日本大震災に遭ったその数ヶ月後の7月に、ノルウェーでは大きなテロがありました。その時、ノルウェーの人々は犯人を責めることよりも、なぜそういうことをしてしまったのか、なぜそういう犯人になってしまったのか、という視点で考えたそうです。テロ事件を社会問題、つまりは自分も担い手である社会の問題であると、一人ひとりが考えたのではないかと強く感じました。ノルウェーでは受刑中であっても進学ができるそうです。つまり、日本の刑務所では、「罪を償う」ということに重きが置かれると思うのですが、ノルウェーでは「社会復帰」とか「更生する」ということに重きが置かれるのだと思います。犯罪を犯してしまっても、更生の可能性がある者については、そのあとの人生についてもきちんと考えていることに心打たれました。とはいうものの、この2011年のテロの犯人に関しては、国民の間でもいろいろ賛否はあったようです。こういった部分は日本でももう少し考えていいことではないかと思いましたが、



テロ犠牲者のためのメモリアルセンター(オスロ市)

最後に、私の知り合いにひきこもりの方がいるのですが、東日本大震災をきっかけにその家庭の空気が変わったことがありました。あのとき、一瞬、社会がフラットになったような、私はそんな気が

しました。何かを始めるチャンスが、いろいろなところにちりばめられていたような気がします。誰もが、自分が求められているのだ、ここにいていいのだと思える社会を、震災という悲しみを経験してではなく、ノルウェーのように意図的に社会がつくり上げている、私たちがつくり上げて子どもたちに伝えていくことができればと思いました。

**成田** 眞野さん、ありがとうございました。

砂子さんは、どのような点でノルウェーは再チャレンジできる社会だと感じたのでしょうか。

**砂子** DVクライシスセンターでは、英語やノルウェー語が話せない移民の方々のためのノルウェー語の講習会や、DV\*加害者向けのセミナーなど、再チャレンジ、社会復帰ができるシステムがありました。



また、ノルウェーでは専業主婦の世帯が非常に少なく、10%以下です。ほとんどの女性が働いているのですが、女性の25歳から60歳まで、労働参加率が一定です。一方、日本では、出産する時期にあたる30歳前後に仕事を辞めてしまうので、働いている女性は若い方や、子育てが一段落した世代のパートタイマー、非正規雇用のシニア世代ということで低賃金になることも多いと思います。

ノルウェーは労働組合の組織率が非常に高く、同一労働・同一賃金を目指しています。

それから、大学まで教育費が無償ということでしたが、30代から40代の学生も30%以上いらっしゃるということでした。職に就いてからキャリアアップのために勉強することもできますし、パパ・クオータ制\*のおかげで、出産しても女性が働ける場がたくさんあるということが印象的でした。

ノルウェーというと、社会福祉国家ということで、

国が守ってくれているというイメージを持っていたのですが、そうではなく、一人ひとりが年齢・世代や立場にかかわらず自立している国だと思いました。生涯、生きがいのある暮らしをして、社会も活性化していく、国に対しても企業に対しても、市民が働きかけをしていくこともできる。ここでは、すべての人が、自分の能力を最大限に発揮して、それが国になっているという印象でした。そのような再チャレンジできる社会制度が、日本でもどんどん導入されればいいなと思いました。

**成田** 再チャレンジできる制度やノルウェーの弱者支援の考え方などを紹介していただきました。

DVクライシスセンターの話が出ましたけれども、私たちはこのクライシスセンターを管轄する国の機関である「子ども・青少年・家族庁」も訪問しました。DV\*だけでなく、障がいのある方や移民の方なども含め、すべての差別をなくすことに取り組んでいる機関です。こちらについて、八幡さんからお話しいただきたいと思います。



Church City Mission(オスロ市)

**八幡** LGBT\*、移民の方、女性への暴力、さまざまな障がいのある方など、人権の不平等を解消するための“庁”があるということだけで驚きました。



人権問題ごとにセクションがあり、リーダーの方は男女半々程度だそうです。「すべての人の人権」について力をいれているということです。

FacebookなどのITツールを使い、教育や広報にとっても力を入れていました。

それから、差別解消に向けて横断的に取り組むために、すべての省庁と連携して行動計画を作ったのですが、このような行動計画を国で作ったのはノルウェーが初めてということで、世界中に広めるために国連やEUにも働きかけているそうです。ユニバーサルデザイン(障がいの有無にかかわらず、すべての人にとって暮らしやすいようにデザインされている社会)を目指しているそうです。

私はさまざまな分野での24時間ホットラインに関わっており、そのコンセプトは弱者を取りこぼさない「社会的包摂」です。その概念はヨーロッパからきた言葉だと聞いていました。なるほど、この考えなのだな、と納得しました。

行動計画は自治体が差別解消に向けて取り組むための道具となり、また、ローカルレベルで良い事例があれば参考にしていくのだそうです。

男女平等先進国と言われるノルウェーでも、まだまだ女性は保育士や看護師などの伝統的な女性の職業といわれる職業を選んでいるので、男性も巻き込んで変えていく必要があるそうです。私は、看護学校の非常勤教員をしているのですが、最近、男性の生徒が増えてきています。給料が上がり、社会的評価が上がると男性もそういった職業を選ぶのだと思います。保育士・介護士も家族を持てるぐらいの給料にしなければならないと思いました。

日本では、同性愛の方々がお子さんを持つこと(養子縁組)は、まだ不可能です。

ノルウェーでは、精神的・知的・身体的障がいは、性虐待につながっており、大きな課題と話されていました。また、3年前に政権交代があったのです

が、男女平等・性的指向などへの差別に対しては法律が整備されており、方針は変わらないそうです。それでも、まだ差別があるから常に闘わなければいけないとおっしゃっていました。ノルウェーに住んでいる人は誰でも同じ権利を持つというノルウェー方式(The Norwegian Way)という理念に基づいているということです。

ノルウェーでは、法を変えれば、大きくその方向に社会が引っ張られていくのです。つまり、「社会の準備ができていなくても、法でその方向に引っ張っていける」そうです。容易ではないけれども、どの分野においても平等を主流に進めていくということでした。

それから、性暴力虐待被害者支援センターでは、虐待・性暴力に関して、男性も女性も、生涯にわたって無料で治療を受けることができます。移民の方で強制結婚や性器切除の被害を受けた方もいらっしゃるのだそうです。私たちは、性暴力虐待被害者支援センターを日本でも各県につくって欲しいと希望しています。

そして、「3つの行動計画」として、「子どもに対する虐待をなくす」「夫・恋人からのDVをなくす」「強制結婚の被害女性の教育」を大きく挙げていました。



子ども・青少年・家族庁(オスロ市)

シェルターは46か所あり、男性も対象になっています。きちんと安全が守られるように、ガイドラインが作成されています。

統計を見ますと、男性の被害もあり、増加しつつあるそうです。緊急性のある性暴力・レイプの被害に関しては、病院主導型のクライシスセンターが一定の範囲内に必ずあるということでした。

保護のサービスの質は法律で規制されており、男女別々の区域に保護され、鍵を用いて安全を確保しています。ヘルスネットワークでは、ケースワーカー、児童保護や警察や社会福祉など、いろんな分野とつながっています。シェルター利用者の62%が移民の方だそうです。車いす利用者など、障がいを持つ方のシェルターをもっとつくらなければならないとおっしゃっていました。トロムソでは国からの費用で、シェルターとして8階建てのビルを建てるそうです。そういうことに予算がついて、男女が共に入れる、安全でかつ障がいのある人も受け入れられるようなセンターになるのだと思います。

性暴力のカウンセリングセンターを利用したことがある人の83%は女性でした。虐待のスタートは子ども時代からでした。

実は、ノルウェーの性交同意年齢は16歳だそうです。日本は13歳です。ノルウェーでは13歳の子どもがたとえ自分から望んでも、性行為は強姦罪になります。日本の「性暴力禁止法をつくろう」というネットワークでは、性行為同意年齢を15歳とする刑法の改正を希望しています。ノルウェーの性交同意年齢は16歳ですが、もうすでに結婚している移民の方々の中に、13歳で結婚している人もおり、文化の違いで不法として扱えないでいるということでした。

帰ってきてからインターネットで検索してノルウェーのブログを見つけました。女の子が「お母

さんが『結婚しろ』と言うので、もう学校に行けないんです」と言ったことに対して、ノルウェーの方が、警察や児童福祉に連絡したというものです。結婚式に400人ぐらいの人が集まって反対し、その女の子は「結婚したくないです」と言って帰ったという内容でした。実は、これは国際ガールズデーの斬新なキャンペーンだそうです。世界的なNGOのノルウェー部署が、「児童婚によって女性は可能性や教育の機会を奪われているのだ」ということを訴えたものでした。強制結婚させられている女の子は、毎日3万9千人、9人に1人が15歳になる前に結婚し、3人に1人が18歳未満だそうです。啓発の手段の斬新さに驚きました。

もう一つ最後に。これはオスロ空港のトイレで、男性と女性のマークが両方並んでいました。広くて、男性も女性も障がいのある人も子連れの人も入れて、多目的トイレのようでした。それからコペンハーゲンの空港には、ひざまずいている人の絵がありました。祈りの場だということです。多様な宗教の人を受け入れているということを実感しました。



**成田** ありがとうございます。

国の機関では、DV\*だけではなく、あらゆる差別、

あらゆる弱者を置き去りにしないで、民主主義を進める国の意気込みをととも感じました。「まだまだチャレンジすべきところはたくさんある」という担当者の言葉が印象的でした。

では、最後に、この視察をとおして、印象に残っていること、気づいたこと、今後の活動等に活かしたいと思うことを、お話しください。

**相澤** 私は学校支援地域本部事業として、中学生と関わる機会が多くありますが、今回の研修でネットワークとその活用大切さを改めて感じました。また、いろいろな意見を聞く大切さを改めて感じました。今後の活動に活かしていけたらと思います。

**齋** 私からは都市計画と教育について報告しましたが、一緒に参加したメンバーや研修先での人との出会いから、自分ができていること、また足りないものが可視化されたように思います。ノルウェーの女性たちがそれぞれ口にしていた「常に努力しなければならない」、その言葉を忘れずに、長期的に日々の家事や仕事に取り組んでいきたいと思いました。

**砂子** 専業主婦の立場で、子どもが小学3年生なのですけれど、1週間ノルウェーに行くというのは本当に大変なことでした。その分、日本で何ができるのだろう、自分の周りで何ができるのだろうということを考えながら視察に行ってきました。今、どうにかしたいということがある方、今日お集まりの皆さんと前例をつくって行って、少しでも日本でも取り入れて改善ができればいいなと思いました。

**二瓶** 私はまちづくりに関わっていて、そのまちづくりを視察できる機会ということで、さまざまなことを学んで来ようと思っていたのですが、あまりにもノルウェーという国が素晴らしすぎて…「素晴らしすぎるということは言わないでください」



と言われていたのですが。ノルウェーのまちづくりは規模が大きい、行政のまちづくりでした。私たちのまちづくりはまだまだ小規模なのですが、そこでできることをやりたいと思います。トロムソで視察したトロムソ・マルカという公園が一番印象に残っていますし、それを少しずつ地元でやっていけたらなと思いました。

**眞野** 私は砂子さんと齋さんと同じで、小学生の子どもがいるのですが、本当に行って良かったなと思いました。何よりも、このメンバーに出会えたことが本当に一生の宝になると思いました。仕事では、大学生の長期インターン生のマッチング事業を行っていて、私はビジネスマナーの講座を担当しています。ノルウェーに行ったあと、ビジネスマナーのコミュニケーション的な部分を強化して、自尊感情を高めるプログラムなどを少しずつ取り入れて、まずは若者を、私たちが願うような大人にしていこうと頑張っています。私もまだまだ成長途中の人間だと思っていますが、地域の活動も、PTAや子供会の活動も、うまくネットワークを捉えていきながら日々生活していけたらなと思いました。

最後に一つ。電車に自転車のマークが描いてあるのが、私が一番感動したことです。電車の乗り口に自転車のマークがあって、自転車に乗ってきた人はそこから乗るといいます。自転車の人

にも配慮されている。すべてにおいて感動した旅でした。

**三平** ノルウェーでたくさんの人にお会いして、たくさんのネットワークを視察してきたのですが、眞野さんのお話にもあったとおり、一緒に行ったメンバーにとっても恵まれていて、それこそ異分野のネットワークで、今まで自分の人生に経験のない発想の観点でお話しされるメンバーがとても新鮮で、研修に参加したことで成長できた部分があったと感じます。今後もこのメンバーと交流を続けて、このネットワークを復興のまちづくりに活かしていきたいと思います。

**八幡** この仙台でノルウェーから学ぶだけではなく、東日本大震災からの復興と女性リーダー研修が開始されていることについて、ノルウェーで報告してきたことがすごく誇らしかったです。「変わりなさいよ、世界中」という、女性たちとノルウェーの国の情熱が伝わってきました。インスピラのメンバーは、電話番号とメールアドレスの一覧をくださって、「質問など、何かあったらすぐメールして」とおっしゃってくださったんです。世界が生き延びていくには、排除や壁をつくることではなくて、平等や人権や愛。そして、話し合っ歩き寄り添っていくこと。これが正解と確信しているからですね。

そういう世界でも、路上生活で物乞いをしている人がいました。男性も女性もいました。ノルウェーは福祉国家なので、あの人たちがあそこでお金をもらう必要はないという意見もありますが、物乞いをする権利もあるという意見もあるそうです。

それから、施設の移転とか何かを建てるというときに、「あれは一体どうなったか」と思うほど、延々と話が決まらないそうです。でも、トップダウンで決めるのではなくて、すべての人の意見を取り入れて積み上げて、歩み寄って決めていくので時



間がかかるということだと思います。そういう辛抱強さというのは、保育園の暖房のない部屋で昼寝をする赤ちゃんとか、みぞれの中、山や岩場で遊ぶ子どもたちなど、小さいころから培われているのだと感じました。

**渡邊** 日本とノルウェーの一番の違いは、ノルウェーはこういう社会にしたいと思ったとき、まず法律を変え、変わった法律に対応していくところです。法律を変えるためには、政治が大事だと思うのですが、その政治に対して、若い時から、当事者意識がとても高いです。

それから、多様性を認め合うということですが、多様な意見を一つにまとめていく訓練を、小学校でのディベート教育のように、小さい時から教育されており、とてもいい循環ができていると感じました。日本との違いを実感しましたが、それをどこかで変えなければいけないと思うので、私たちに何ができるのかということ、一人ひとりが考えていかなければならないと思いました。

**成田** ありがとうございます。

これで、報告会を終了させていただきたいと思います。

今後の活動やまちづくり、職場などで、私たちの報告を少しでも活かしていただければ嬉しく思います。

## COLUMN ノルウェー訪問記

公益財団法人せんだい男女共同参画財団理事／NPO法人ハーティ仙台代表理事 やはたえつこ

### ノルウェーの首都オスロ、 子ども・青少年・家族庁を訪問

担当者に話を聞いた。「ここでは男女平等推進の他にすべての差別の問題について国の政策推進を担当。児童の保護、DV\*、差別撤廃(各種障がい、LGBT\*、民族)、暴力防止教育に取り組む。他省と連携し、差別撤廃の専門知識を持ち推進する。世界で最初に国の行動計画を作成した。男女平等先進国と言われるが、女性はまだまだ伝統的な女性の仕事を選んでいる。もっと推進の必要がある。差別は性虐待、HIV感染、自殺につながっている。

ノルウェーは3年前に政権交代したが、男女平等・性的指向への差別について法的平等は守られる。法を変えてゆくことで、大きくその方向に社会を引っ張って行くことができる。社会がまだ準備できていなくても、社会を動かして行くことが可能。どの分野でも平等を主流にして勧めて行く。

428の自治体に、DVシェルターは46か所。サービスの質は法律で規制。男女の保護は区別され、鍵を用いて安全は確保される。利用者の62%が移民。車いす利用者のシェルターが必要。暴力加害者は矯正教育を希望すれば無料で受講できる。

性虐待被害者の支援として、急性期の被害者には各地に病院主導型のセンターがある。その後は、22か所の性暴力カウンセリングセンターを、男女を問わず無料で利用できる。2014年度は2,567人が利用。80%は実際に性暴力を受けた人、20%は受けたと思われる人。被害者の83%が女性。付き添ってきた人の68%が、母親か親族の女性。虐待のスタートは12歳以下が71%、加害者の77%は男性。ノルウェーの性交同意年齢は16歳。しかし、

難民で入国する人々の中には13歳で結婚している人がいる。文化の違いで不法として扱えないジレンマがある」



### ノルウェーの北部トロムソ市、 キリスト教の奉仕施設を訪問

街中の小さなビルの中。担当者によると「貧困と戦っている。社会的に阻害されている人の支援、代弁活動を行う。ボランティア登録している300人の殆どが女性。貧困家族に対し、長期休暇には映画、プール、スキー、ハイキングに連れてゆく。スポーツの道具は新品。若い人々にはバレンタインデーのコンサートを開催。薬物濫用の家族を食事やコンサートに招待。祈りの場を用意しキリスト教でなくても受け入れる。週末のパーティで集まる若者の見回りに、女性が街のパトロールを実施する。特に移民の女性には民主主義の教育、女性の権利を教える。今日は、9時にホットオートミールの提供。12時に麻薬常用者の集まり。午後はノルウェー語の講座を開催した。ホームレス、精神障害を持つ人、外国人で問題を抱えた人、難民で来た人、子連れの人など、怒りが心にいっぱいの人などが70~80人ここを利用。寄付で賄う財政は厳しい。ボランティアの女性たちが編んでくれた靴下などをバター通りの店で販売しているので、そこで作品を購入してもらえば運営費になる」とのこと。



トロムソのクライシスセンターのスタッフから話を聞いた。「自治体は必ずクライシスセンターを持つ。小さな自治体は合同で持つ。私たちが始めはボランティアで運営していたが、法律ができてから仕事として働けるようになった。8つの自治体が連携している。クライシスセンターは、教会関係での設立が半分、NPO設立が半分。現在のセンターは4人の女性が入所可能な古い家。新しいビルを建てる計画があり、8人の受け入れが可能になる。2010年に法律ができ男性も受け入れた。はじめは反対の意見をもったが今は納得しつつある。無論ひどい暴力にあっている人のほとんどは女性。2014年統計では、64人の利用のうち、女性31人、子ども32人、男性1名。女性の半分は子連れ、就学前の子どもが多い。無職女性が多い。

保護される人の1/2が移民。自国の人と結婚している人もいるし、ノルウェー人と結婚している人もいる。この国では3年で定住権が入手できる。すると自国の子を

引き取ることもできる。定住許可をもらうために、DVのある結婚を我慢し続けている人もいるが、子どもがいない女性が離婚してもDVの証明があれば定住権を得る事ができる。現在の政権は定住権取得までの年数を5年に延長する方針を打ち出している。

被害者はセンターに2か月間滞在可能。その後、自治体の賃貸アパートに入居する。DV被害者が優先となる。

男性加害者の暴力の矯正教育は、この地区では3人の教育担当者が行っている。

離婚後の養育費は給料天引き、これは養育費支払いの初めから実施される」

私は、翌日バター通りのお店で、リサイクルの本と子ども用の靴下を購入した。



### 人権を学ぶ保育園児

保育園児は、人権・ノルウェーの歴史について学ぶという。先住民のサーメ人の絵や文字が壁に張ってある。教育学・自然科学・語学や建築などで大学学士を取得した人が、子どもの教育に関わる。職員の給料は年収約600万円。男性や大卒の人が働くのもうなずけた。親が望むのは、戸外でもっと遊ぶこと、ナイフを使いこなすこと、お互いをいたわれる人間に育つことだった。幼児期から厳しい自然とともに生きる力をつけること、人権と平等の感性を持つこと(男女はもちろん、移民・宗教などに関わらず)、お互いを思いやる人間になることを重視していた。「午後4時に仕事が終わる、週末の休みが必ず取れ、長期休暇は1か月。女性も男性と同じように仕事に集中できて評価も平等なら、極夜(太陽が昇らない現象)のまだ真っ暗な朝7時に子どもを預けて仕事に出ても平気だな」と思えた。



### 仲良しリーダーが誇りの小学生

小学3年生の発表会を見学。劇中で休み時間に子どもたちが遊ぶ様子があった。サッカー、アイスホッケー、ゴム跳び、キャッチボール、そして手遊び。子どもの遊びは世界中同じ。遊びが世界共通なら、「性暴力防止のキーワードを手遊びや踊りで伝えれば良い」と思った。教師との意見交換会で、仙台市が小・中学生に配布している性暴力予防のパンフレットを紹介した。「子どもの発表会を

みて、この指導に踊りを組み入れたいと思います」と話し、自分の宿題にした。

オレンジ色のベストを着た仲良しリーダーが休憩時間に登場。学期ごとに選挙で選出される。とても名誉なことだそうだ。業間休みに子どもたちは冷たい氷雨がパラつく外に一斉に出てゆく。リーダーはオレンジ色の目立つベストで散らばり、一人ぼっちになっている子どもはいないかと気を配る。遊び方の指導も行う。「いじめ監視委員」ではなく仲良しリーダーなんて素敵。



### 人権の教育・討論の訓練

4年生の「人権について」の授業。昼食の弁当持参派と給食賛成派のディベート。「戦争や抗争は対話することで防げます。意見ある人は指一本、それにコメント付け加えたい人は指二本、質問のあるときは指三本立てます。まずグループを2つに分けて、リーダーを決めよう。」ほとんどの子が指一本を挙げてリーダーを希望する積極性。「グループ毎に15分間話し合ってください。自分のグループの主張の良い点を出してください。リーダーは全員が意見を出しているか注意して」先生は話さない子がいないようリーダーに声をかける。「相手のグループの良いところも考えてメモして」先生がリーダーに「どうだった？」と聞くと、「にぎやかだったよ」「同時に複数の人々が話すので、まとめるのが難しかったよ」とリーダー。それぞれのグループから意見を交互に出す。指一本を挙げる子が続く。ある子が「なんでコックがストレス感じるんだよ。仕事だろ！」と乱暴に発言。先生は、すかさず「あなたの言葉は良くないよ。あざける言葉ではなく、あくまで相手を尊重する言葉で伝えることが大事。人と対話するには、他の人の意見を尊重することが大事だよ」と説明。「良い議論ができたね。このような対話の行い方が重要。大きなことを決めるにも対話が大事」と。こうやって子どもたちは、自分の意見を持ち、積極的に表現すること、お互いを尊重して議論を進めることを学んで行くのだ。これぞノルウェー魂の真髄と思った。





# 視察研修に 参加して



# 「復興まちづくりへのヒント～私たちができること」

## 「保育と教育の現場で感じたこと」

相澤 雅子

布の絵本づくりグループ「かざぐるま」代表  
南小泉学校支援地域本部 スーパーバイザー  
輪！っかばやし子育て応援団 副団長

私は、子育て中の方や子育てを支援する立場の方と布の絵本づくり「かざぐるま」で活動しています。市民センター・保育所・幼稚園・児童館などへの布の持つ温かさを活用した絵本やおもちゃの貸し出しや、おもちゃ作りの指導、読み聞かせを行っています。32年前に、子ども連れ主婦の社会参加として始まったグループです。また、震災をきっかけに、東北大学を通じておもちゃを寄贈したり、石巻市などからの要請で手作りおもちゃの講座を開催したりする活動も行っています。

ノルウェーは子育て支援の先進国と聞いてはいましたが、なかなかこのような研修の機会はなく、勉強させていただけるならと思い、参加を決意しました。今回の研修では、特に保育所と小学校の見学が興味深いものでした。

まずは、一日目に訪れた保育所についてです。

訪問した保育所は、自然に囲まれた壮大な景観の敷地にありました。雪の積もった寒い日でしたが、子どもたちはのびのびと元気に遊んでおり、明るい笑顔で私たちにあいさつをしてくれました。向かう道には、灯籠のようなロウソクの灯りが灯されており、私たちを歓迎してくれていました。テ



ブックスプランク保育園 テントラボ(トロムソ市)

ントラボの中は、薪ストーブとキャンドルの灯りで、温かな雰囲気でした。このテントラボを子どもたちも使っていると聞き、保育室だけではなく外での活動もたくさん行われているのだと感じました。

園長先生の話の中で、「自然の中で遊びながら学ぶことを大事にしている。」という言葉が印象的でした。保護者も「できるだけ外で遊んでほしい。」という願いを持っており、一日中外遊びをすることも珍しくないそうです。外には、みんなで使うそりやスキーもあり、子どもたちが楽しめる工夫がなされていると感じました。

保育園の中を見学させていただきました。入り口近くの部屋では、ベビーカーですやすやと子どもたちが眠っていました。暖房が付いておらず、驚きましたが、子どもたちが健康であるからだと感じました。また、作業台や椅子などの様々な物が、大人にも子どもにも使いやすく設置されており、保育環境を大切にしていることが伝わりました。給食は、なるべく地産地消にこだわり、手作りで行っているそうです。

自然を生かした環境の中での保育、また、子どもたちの成長を第一に考えた環境が整っており、とても素晴らしいと感じました。

園では、男女同じプログラムで保育を行っているそうです。いろいろなタイプの子どもたちがいるので、一人ひとりが違うことを理解し、尊重することが大切であるという話があり、日本の教育においてもとても大切なことだと感じました。保育する大人だけでなく、子ども同士の関わり合いにおいても、この考え方を大切にしていました。ままごとやもの作り、科学的な遊びなどの様々な

体験を通して、男女平等の価値観を育んだり、人権の大切さを教えたりしているのだそうです。小さな頃からこのような考え方を学ぶことで、互いを認め合うことの大切さを自然と身に付けることができるのは、とても素敵なことだと感じました。

トロムソの保育所は幼児の人口7,207人に対して、100か所ほどあり、待機児童はいません。保育料のうち自己負担は15%で、あとの85%は、国が負担しているそうです。日本に比べ、保育環境が十分に保障されていると感じました。



プッケスプラング保育園(トロムソ市)

保育士は、3~4年かけて資格を取ることができるそうです。訪問した園の職員の男女比率は、半々になるようにしているとのことでした。男性の職員が多くいることで子どもたちが活発になる良さがあるという話がありました。保育士だけでなく、工作・大工・技術者・教育学など様々な分野を学び、専門資格を持った人が職員として配置されていました。専門の知識を生かした保育を行うことができる良さがあり、子どもたちにとって恵まれた環境であると感じました。

次に、5日目に訪れたスタバンゲルの小学校についてです。

ここは、スタバンゲルの日程をコーディネートしてくださった中さんのお子さんが通われている小学校です。仙台市の地域連携事業で、学校支援地域本部があります。私は、その中で地域と学校をつなぐ役割のスーパーバイザーをしていることもあり、この訪問は、特に興味深いものでした。今回の訪問のために半年かけて準備をしてくださったそうです。

朝の全校集会では、学年ごとに交代で発表する場があるそうです。今回の発表は、学校の一日の様子を、3年生が先生役、生徒役になり演じてくれました。

全体集会が終わると、教室に鍵をかけて、全員外に出て遊ばせるのだそうです。この日は雨降りで寒い日でしたが、子どもたちが雨の中でも楽し

そうに遊んでおり、先生たちは温かく見守っていました。

休み時間を終えてからは、4年生・7年生の授業に分かれての見学でしたが、私は7年生の授業に参加しました。今回一緒したメンバーの砂子さん、真野さんが東日本大震災体験プレゼンテーションをしました。プレゼンテーション後、生徒からの質問の多さに驚いたとともに、お二人の発表を聞くことができ良かったと感じました。また、仙台の小中学生にもぜひ聞かせたいという思いを持ちました。

また、先生方との懇談会もあり、様々な質問に答えていただきました。日本の教育現場はとても多忙で、遅くまで学校に残り仕事をしていることを知って驚いていましたが、ノルウェーの教育現場も専門職なので忙しいと話されていました。

子どもの権利などは、学校や家庭でも話し合うことが多いと聞きました。学校でも、個性を大切に、人権、権利を尊重して、平等を大切にしているのだそうです。いじめなどもなく、子どもたちの笑顔が多いとお話でした。また、保護者も教育熱心なので、校外での活動などにとても協力的だそうです。

学校は、5歳から13歳までの生徒がいて、20クラスあります。授業は、14時までで、親が迎えに来る16時まで、学童保育専門のスタッフが生徒を見ます。

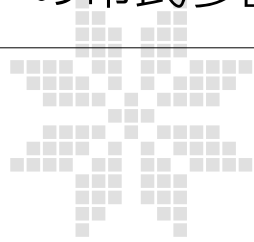


ガウセル小学校(スタバンゲル市)

話の中で特に印象的だったことは、仲良しリーダーという存在についてです。仲良しリーダーとは、9歳から13歳の生徒で、遊びを教える役割を任されています。仲良しリーダーになりたいと希望する子どもは、とても多いと聞きました。この日も私たちのために楽しい絵のプレゼントを笑顔で持ってきてくれたのが嬉しかったです。

小学校訪問では、小学生が自分の考えをもって活動していることがわかりました。自分の関わっている活動のヒントもいただけた気がします。

## 「都市計画への市民参画」



齋 知子

岩沼市総務部総務課 技師

私は岩沼市の震災復興事業において、防災集団移転事業や災害公営住宅の建設に携わっています。復興に関わる技術者として研修の話をいただいた際、資料で目にした「ノルウェーでは建設業界で多くの女性が働いている」という言葉が参加を決意するきっかけとなりました。建設業界は、日本では男性社会とされており、私自身男性に囲まれてがむしゃらにやってきた自負はありながら、女性として母として常に働き方に満足していません。男女平等先進国と言われるノルウェーの女性はどんな環境で、どんな考えを持って仕事をし、男女平等がもたらすものとは何なのか。そして、北欧の厳しい自然環境と共存する都市計画がどのようなプロセスによって生み出されるのか。ノルウェーから学ぶテーマを二つにしばり、視察研修へと臨みました。

男女共同参画を考える上で印象に残るのは、トロムソでの様々な方との交流です。研修をコーディネートしてくれたアンシャスティさんの勤務する建設コンサルタント会社で、「男性は細かいことにとらわれず、一方女性は柔軟性を備えている。違いを認め合い、長所を活かすことで技術が融合するのです。」という互いを尊重する男性スタッフの言葉が心を打ちました。また、男女の別に関わらず育児休暇の取得が浸透しているノルウェーでは、休職によるリスクを懸念する日本とは異なり、企業側のマネジメントにおいて、復帰を視野に休暇中のサポートに力を入れています。男女同権であるという考え方は、仕事とプライベートのバランスがきちんとしていて、そこに男女の差がないこと。つまり、男女共同参画社会を目指す上で必要なのは、女性への支援だけではなく、男性の意識、

働き方を見直すことが本質なのだと実感しました。



建設コンサルタント会社asplan viak (トロムソ市)

アンシャスティさんの取り計らいにより、女性異業種ネットワークとの交流会では忌憚のない意見交換ができました。仕事を持っているだけでなく、役員や代表という重要なポストに就く女性たちですが、「仕事が忙しくなれば、家は散らかるし、洗濯も溜まる。でも家族が手伝ってくれるまで目をつぶるようにしているの。」とメンバーは言います。夫婦で家事を分担することによって、時間に余裕が持てると共に、男女の役割分担を意識させない子育てができます。そして、自発的な手伝いを促すことで、自立させることが大事なのだと話してくれました。「完璧を目指すのではなく、仕事も家庭も自分らしくあるための努力が大事なのよ。」というシンプルな答えが心に響きます。ノルウェーと日本を比較すると、育児に関する制度の違いは大きい。でも、目の前の生活にとらわれず、長期的なヴィジョンを持つことによって意識を変えることができる。そんなポジティブな姿勢でいることがワーク・ライフ・バランスを保つ上で大切であり、明日を変える一歩なの

だと切に感じました。

交流会に向かう途中のトロムソの住宅地では、道路に面した窓辺に照明が灯っていました。住民自身によって、厳しい冬と長い夜に温もりを演出しているのだと思います。家族との時間や地域への愛着、丁寧な暮らしを感じ取ることができました。

都市計画を主題に、トロムソとスタバングルの二都市では、緑地を活用したプロジェクトの説明を受け、同時に震災復興のまちづくりについてプレゼンテーションする機会をいただきました。両都市とも、自然の地形を活かして遊歩道や公園を整備し、都市全体を緑地でネットワーク化した計画を進めています。健康づくり、通勤のために遊歩道が使用され、公園でアウトドアを楽しむなど、市民生活の一部として根付いていました。都市計画を決定する上で必要となるのが市民参画であり、施行のプロセスとなる意見収集や協議の手法について、市役所の方に話を伺いました。行政はマスタープランをホームページ、新聞等のメディアを利用して市民に公表し、公募やワークショップの他SNSを活用するなど、ツールの幅を持たせて意見収集を行っているとのこと



トロムソ市役所

参加者に偏りがなく、少数派の意見をも大事にしている、子どもを主体とした議論が行われるなど、対話の多様性に感銘を受けました。事前協議に時間を費やすことで、計画の進捗が遅れが生じるデメリットはありますが、官民が協働でまちづくりを行うことにより、計画の質が向上し、市民には当事者意識が生まれます。その結果、地域への愛着や環

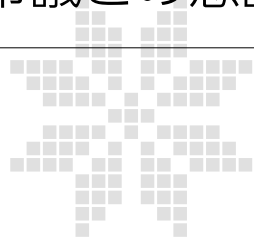
境意識が強まり、管理のボランティア活動につながるなど、持続的なまちづくりが行われていました。都市計画における行政の役割とは、市民と技術を繋ぐハブ機能であり、全ての市民に快適なまちづくりであるよう、市民が政策に興味を持ち、公共議論の場に参加できるような仕掛け作りを目指し、職務にまい進したいと思います。



52の散歩道プロジェクト(スタバングル市)

最後に、研修をきっかけに出会った参加メンバー、協力いただいた方々へ感謝申し上げます。メンバーの立場や知見が、私にとって刺激と意欲となり、色々な人との関わりがもたらす可能性に期待が持てます。ノルウェーの女性たちが口にしてきた「ネットワークの活用」を実践できるよう、男女平等社会の一助となれるよう努力していきたいです。

## 「トロムソ市議との懇談から学んだこと」



砂子 啓子

i-くさのねプロジェクト 代表

2016年1月25日、ノルウェーの北に位置するトロムソ市役所にて労働党所属の2名の市議会議員と、視察メンバーが懇談をさせて頂きました。ノルウェーの市議は無償のボランティアです。

はじめにお話を伺ったランギンスさんは、若さあふれる31歳の女性で1歳のお子さんを持つお母さんです。都市開発の委員長をされています。

「どんなレベルの所でも男女はいるべき」とランギンスさんはおっしゃいます。ノルウェーでは、最初から女性が男性と対等だったわけではなく、この40年間で少しずつ変わっていったのだそうです。今も状況は変わり続けています。ひと昔前までは、保育園に通う時から代表になって話すのは男という習慣だったそうです。どんな場でも自ら努力しないとその場を取られてしまう。そこで、女性たちはグループを作って、男性よりも皆の前で話す、男性よりも伝わる文章を書くという勉強を続けてきました。

現在ではパパ・クォータ制\*により男性の育児休暇の利用数も日数も増え、今は様々な分野で男

女が混ざり合って活躍しています。

—女性は外の力を、男性は家の中の力をつける—  
(このワークシェアリングについては、今なお意見が分かれるところでもあるそうですが、男女平等先進国であるノルウェーでは主流になっています。)

ランギンスさんは、議員になってから出産し、復帰後は赤ちゃん連れで会議に出ました。

出産後も女性が働き続けることができるように、国は保育園に入る権利を政策として取り入れました。とはいえ保育時間は16時半まで。ノルウェーでは、一般的に仕事は16時に退社し父親か母親が園に迎えに行きます。仕事をしているからと言って、子ども達に負担をかける働き方をしていません。限られた時間の中で集中して働きます。

「子どもに負担をかけない働き方」という事を何度もかみしめました。日本ではどのように働くことができるか、どのように改善できるか。ということについて、お話を聞きながら考えました。

ランギンスさんが退席されたあとに、クリスティン・ロイモさんが入室されました。ロイモさんは、視察者一人ひとりに丁寧にあいさつをしてくださいました。トロムソ市議会は、行政執行委員会と5つの常任委員会からなりますが、ロイモさんは、トロムソ市議会執行役の一人です。

女性が活躍することにあたり、議会をはじめ社会において「何かを決める」ところに関わることが大切、とロイモさんはおっしゃいます。1913年に女性の参政権が与えられて、今までの過程でキーポイントになった女性がたくさんいるということでした。「あの時代にはこの女性が働いてくれた。



ランギンス氏/トロムソ市議会議員(左から3番目)

この時にはあの人があった。それを経て今の男女平等があり、今はさらにその先を進んでいる。」と熱く、語ってくれました。ロイモさんはさらに、「はじめて女性で首相になった『グロ』の存在はものすごく意味があった。」と続けました。



クリスティン・ロイモ氏/トロムソ市議会議員

また、ロイモさんは、リーダーとして大切にしていること等についていくつか教えてくださいました。

■時に自治体や世界には難しい決断があるが、すべて「人間としてどうあるべきか」考えていること。

■女性も決断する場に参加することはとても大切であると常に認識すること。かつては、家族のニーズに応えるのは女性で、女性が家庭の仕事を担ってきました。そういう女性が下支えをして社会貢献をしているのに、決める場所には、お金を稼ぐ人(主に男性)が多かったのです。

■まず、「きまり」「法律」「仕組み」を作り、それから計画的に、10年、20年と少しずつでも進めていき、社会を変えていく。そのため、教育は大切です。社会を変えるために勉強し、話し方、文章の書き方などを訓練します。

■ひとりだけで進めるのではなく、ネットワークを作って一人ひとりにチャンスを与えながら進めていくこと。特に仕事とは別の幅広いネットワークを持つことが大切です。女性をリーダーに、と思うのならば、一人二人の女性と仲良くしているようではいけません。多方面他業種の方とネットワークを作り、手を繋ぎ協力し合ってリーダーとなる女性をサポートします。多少の違い

や気になる所があっても、モデル、お手本として形になるように良いところにフォーカスして寛容に受け止めることです。特にはじめてリーダーになる女性は、色々な試練がありサポートが必要です。リーダーは、「みんなの代表」なのです。「阻止」「拒否」があっても手をつないでいけば必ず前進します。

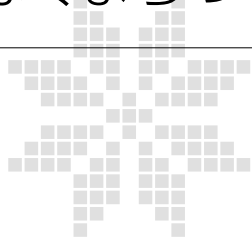
ロイモさんは、とても明るく力強い方で、私たちは沢山のヒントをいただきました。「様々な職種に男女がいないとバランスが取れない。ノルウェーでもまだまだチャレンジすることがたくさんある。」と最後に締めくくりました。

日本でも取り入れられること、実践できることは何でしょうか。前例のないことならば皆で協力して、女性も能力を活かし活躍する成功事例を作り、システム化して広げていけるような取り組みを進めていきたいです。そこには子どもの権利、保護するシステムも重要です。行政、政治、市民が一体となり協力して地域社会をつくっていく。その取り組みの中には多くの女性の感性、能力が必要となります。

みなさんで前例を作っていきましょう。

貴重な経験をさせていただき感謝しております。本当にありがとうございました

# 「次代につなぐまちづくり」



二瓶 明美  
南蒲生町内会 復興部

ノルウェーは男女平等、福祉の先進国とのこと。たくさんの方を見て聞いて、これからのまちづくりに活かせればと視察団への参加を決断し、2016年1月24日午後、未知なる国ノルウェー王国視察研修へ旅立ちました。

コペンハーゲンで乗り換えてノルウェーの首都オスロへ。そのオスロから、第1目的地である、日中太陽が昇らない「極夜(きょくや)」が約2か月続いた北極圏のトロムソへ渡りました。

トロムソでの視察は 海沿いにあるブックスプランゲ保育園からスタート。朝8時半、保育園へ到着したとき小雪が舞っていました。やっと5日前から日の光が見えるようになったこの時期は、日の出が11時頃でしたので、薄暗く感じました。そんな中、子どもたちは元気に外で遊んでいました。ノルウェーでは子どもは「誰でも保育園に入る権利がある」と保障され、待機児童がいないそうです。

ノルウェーでは、1978年に男女平等法が男女平等の基盤として制定、2004年に会社法が改正され、クォータ制\*が適用されました。男女が同等に家庭と職場を両立できることを目的として、育児休暇制度や保育施設の充実が重点政策となり、父親の育児参加を促進するため、1993年、父親の4週間の育児休暇制度(パパ・クォータ制\*、母親に譲渡不可能な権利)が導入され、2009年7月より10週間に延長されました。2007年には90%の父親がこの制度を利用しているようです。この育児休暇制度を利用するため、保育園への入園は1歳からとなっています。よちよち歩きの子どものマイナスの気温でさえ、外気にふれさせ風邪をひかない体づくりをしています。お昼寝も窓を開けているそうです。そり遊びやスキー、かまくら作りは雪国ならではの活動ですが、驚いたのは「働

く側もいろんな人がいて良い。職員で変わる、その人が道具である、体験が大切」との考えから、ネイチャー、アウトドアや教育専門学を学んだ人を採用している、ということでした。以上児(3歳以上)のクラス担任が3人の場合、ひとりが保育士、あとの2人はアシストだということです。アシストは自分の得意分野を生かした保育ができるのです。

園庭のほかに山の一角も遊び場となり ラボ(テント)を建てテントの中で遊ぶ、たき火をして自然を勉強するという活動も保育の一環として行っている羨ましい環境であり、施設でした。

ノルウェーの保育時間は7時30分から16時30分までです。ここは郊外にあるため他の保育園より朝と帰りの時間が15分ずつ長く、7時15分から16時45分まででした。ノルウェーでは「延長保育はありえません」とのことです。一般的な勤務時間が8時から16時までなので、定時に退勤し保育園に子どもを迎えに行き16時半には家族揃って帰宅しているとのことでした。夕食は家族団樂のひとつときとして大切にしているようです。

保育園の子どもたちが外で遊んでいる中、私た



ブックスプランゲ保育園(トロムソ市)

ちは室内の見学にいきました。外のグレーの風景とは対照的に、室内は明るくカラフルな色合いでした。保育園では給食とおやつの提供がありました。給食室で調理をし、給食室に置かれているテーブルで食べるという、自宅のダイニングキッチンのような設えでした。その給食室の窓から見える景色がとても素敵でした。海が見える立地条件ということもありますが、その海にはニシンを追ってきたクジラを見ることがあるそうです。

ノルウェーは男女平等を徹底しているので労働条件は皆同じです。家庭でも男女は平等で夫婦が手分けして食事を作ったり、子育てをして家族の時間を過ごし、PTAの会合は夜に開催し、親たちが仕事を休むことなく どちらかが参加できるようにしているということでした。

4日目の夕方、スタバングル市のホテルの一室で、小野坂優子スタバングル大学経済学准教授の「女性のワーク・ライフ・バランスと社会経済の関係」についてのレクチャーがありました。そのなかで「保育園が十分あるに越したことはありません。でも本当に改善すべきは、大人の働き方ではないでしょうか」という考えに共感しました。

トロムソ市役所訪問では、「都市開発、および先進的な森林保護のプレゼンテーション」がありました。守っていききたい自分たちの森という意識が大切だということでした。そのため、女性の参画はもちろん、子どもたちにも意見を出してもらい、いろんな考え方の人たちとルールを考えて進めているそうです。その結果、公共の交通機関を使い歩いて行けるまちづくり「10分で歩いて行けるまちづくり」、「トロムソ・マルカ」と呼ばれる市民(自分)の森ができたということです。街の周りに森があるトロムソ、魅力的でした。自動車通勤をやめて自転車を通う。冬はスキー(ノルディック)で通勤。何より職場に自転車置き場ならぬスキー板置き場が設置されているという雪国ならではの発想でした。

このプレゼンテーションでの都市開発は自然を活かしたものでとても惹きつけられました。日本でも市民を巻き込んだ柔軟な発想のまちづくりが進めば、心豊かな暮らしができるでしょうか。

私たちの町内は震災によって緑がなくなりまし



トロムソ・マルカ プロジェクト

た。自然を取り戻すには植樹からのスタートです。これから何年もかかるまちづくりになることでしょう。

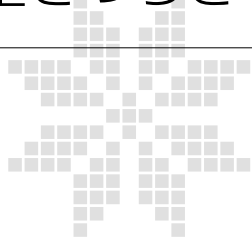
トロムソでの視察行程はインスピラのネットワークで実現した！！という驚きのコーディネートでもありました。今回のノルウェー視察訪問は3都市。トロムソ、首都オスロ、そしてスタバングル。都市ごとに飛行機での移動で耳鳴りに悩まされましたが、上空から見る街並みはそれぞれの特色があって楽しめました。トロムソは雪と氷に覆われ日照時間も短いので薄暗い街の印象、首都オスロは彫刻が街の至る所に飾られていました。スタバングルでは黄色みがかかった岩場の海岸が目につきました。空港からの道のりでその岩を歩道や住宅の外構などに使用していました。街の特産品が景観づくりに役立つのは素晴らしいことです。

このノルウェー王国視察研修においてスタバングル市役所で東日本大震災体験プレゼンテーションの機会を与えていただきました。ノルウェーのまちづくりは国や行政が行う大きな事業であり、私たちの町内のまちづくりとは規模が違っていると考えていました。「私たちもあなたたちと一緒に、できることから始めてます。」と総評を頂いたときにはピンときませんでした。時間がたち思い返すと「始まりは小さなことからスタート」なんだな、と気づかされました。

“次代につなぐ”ためにもノルウェーで学んだことをできることからコツコツと進めていきたいと思えます。



# 「誰しものが生きづらさを感じない社会を目指して」



眞野 美加

せんだい防災プロジェクトチーム  
ママとシネマ実行委員会代表  
新田mama \* cafe代表

2016年は私の人生の中で思いもよらない出来事で幕開けしました。

パスポートなど人生で持つ事もないだろうと思っていましたが、『ノルウェー王国視察研修』の案内をいただきました。これも何かのご縁と思い、またとない経験の旅に出る決意を家族に宣言しました。今まで海外へ行きたいとすら思った事がない自分が決意したきっかけは、自分自身の経験や周りにいる『生きづらさ』を抱えた人達の存在。奨学金を借りながら進学したものの、妊娠・出産によって、好きな仕事を諦めざるを得なかった自分。それを仕方ないと自分に言い聞かせていました。育児休暇中に始めた子育て支援の活動で出会うたくさんの女性…「なぜ」を繰り返し考えていた時期もありました。

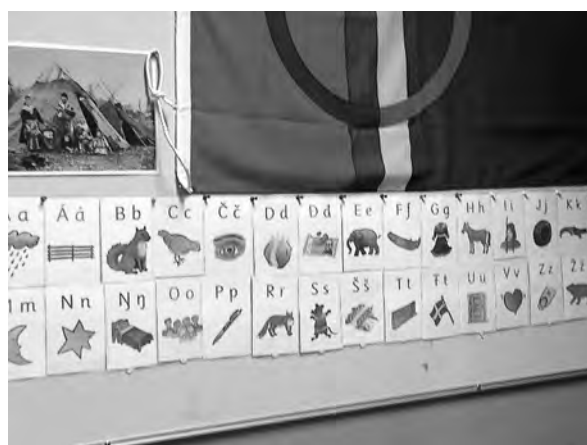
そんな思いで視察に向けてチームで話し合いをしていた時に、ふいに出た言葉が『再チャレンジできる社会』というテーマでした。

ノルウェー王国でのたくさんの訪問先や出会った人達から感じた日本との違いに「違いすぎる」とショックすら覚えたのですが、40年前までは今の日本と変わらなかったという事を聞き、ノルウェーの国民が『男女平等』の国をどのように作り、受け入れ、根付かせてきたのか…に非常に興味がありました。

それに関しては法律・教育・対話の3つがあげられると感じました。

目指すべき社会を叶える為に法律を変える。また自分たちが望む政治家を送り出し、堂々と議論できる政治家に更に育てる仕組みを作っていました。

そして、トロムソの保育所では保育士のみではなく何かしらの専門家という大人が働いていたり、移民の子ども達の言語も共有された環境でした。



ブッケスプラング保育園に掲示してある先住民の旗と文字(トロムソ市)

スタバングルの小学校へ訪問した際にはディベートの時間があり、相手を言い負かすような討論・議論ではなく常に相手を尊重して対話する事が大切にされていました。そして、この相手を尊重して対話する事は行政などの街づくりにも反映されていて、住民の暮らしづくりを考え、意見をまとめて進めていくということが当たり前に行われていました。このような行政の姿勢は、住民が政治に参加しているという意識が高い、または高まる要因のひとつではないかと感じました。

日本でも国勢調査がインターネットでできるようになり、非常に楽だった事を思い出し、もしかしたら日本も希望が持てる！とその時思いました。

さて、私がテーマに掲げた『再チャレンジできる社会』。

結果的には『再チャレンジ』というよりもノルウェーには『誰もが自分の思うように生きること

が当たり前』であって、日本でいわれるルールからの脱線・脱落がないのだなということに行きつきました。

母子家庭であっても、移民であっても、DV\*被害者であっても……経済的な自立ができる社会構造になっています。大学まで学費が無料ですから、親の貧困が子どもに影響せず、教育を受ける事が可能です。

驚いたことは、受刑者でも服役中に進学ができること。これは、刑務所が罪を償う場所ではなく、社会復帰を目的として本当に必要なことを提供しているからだと思います。

そして、待機児童ゼロのみならず、親が安心して子どもを預ける事ができる保育所や学校を目指していました。私自身、働く母親として何度か「子どもがかわいそう」という言葉を受けてきましたので、子どもが保育所で過ごすことが何ら特別でもないこと、保育料の負担が少ないこと、小学校では同じ教室で担任が学童の先生に入れ替わることで学童の時間に切り替わるということに非常に感動しました。

男女平等なんて、当たり前すぎてその言葉自体を使わない、とは先の小学校でディベートの授業をしていた男性の教頭先生の言葉ですが、まさに相手を尊重して意見も述べ合うという教育は、各々の個性を認め合う心を育み、それが安心感につながり、自己決定が可能な社会を作っているのだと実感しました。



ガウセル小学校でのディベートの授業(スタバンゲル市)

とある職場では「女性がいるからというよりは

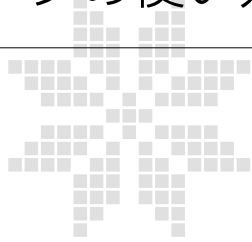
多様な人がいるおかげでリスクに強いチームになる」というお話を聞かせてもらいました。この職場は建設コンサルタント会社で、管理職をしているのは女性でした。その彼女がトロムソ市のプログラムをアテンドしてくれたアンシャスティ、私に大きな衝撃と勇気をくれたことを忘れられません。彼女は、インスピラという女性のネットワークを作っています。このネットワークには誰でも加入できる訳ではありません。今ネットワークに不足している分野を分析し、選ばれた女性のみが加入できるそうです。トロムソでの過密と思えるほど充実したスケジュールはこのネットワークの皆さんが協力して作り上げてくれたスケジュールでした。彼女をはじめ、インスピラの方々とは会食した夜、女性というだけで優遇されるのは男女平等ではない。「男女と言わずすべての人に平等にチャンスが与えられること。さらにそのために、常に学び続ける事が大事」とはっきり言いました。そして「あなた達も、日本もそう願って行動をおこせば不可能な事はない」と続けました。

他にも、語り切れないたくさんの訪問先で見聞きを感じたことがあります。

- ・自分と100%同じではなくても、まずリーダーになりたい女性を応援する。
- ・対話を繰り返し、関心を持つことでリーダーが育つ環境をつくる。
- ・ネットワークを作り、それを効果的に活用すること。
- ・お互いに尊重し合って、安心して意見を述べてもらえる環境をつくること。
- ・学び続けることを諦めないこと。

自分の職場や市民活動の場で私にできることをひとつずつ実行していこうと思います。東日本大震災から5年という通過点を迎えましたが、これからの東北の復興を担う子ども達に諦めない親の背中を見せていきたいと改めて強く思います。帰国後、視察メンバーとスタバンゲルの中さんと連絡をとって、早速イベントの企画もしております。私たちなりの一歩を始めていきます。

## 「ネットワークの使い方」



三平 真希子

株式会社日本政策金融公庫仙台支店  
国民生活事業 融資第四課 課長代理

私は、政策金融機関の職員として、小規模事業者の皆さまへ、事業資金のご融資を行っております。また、社内の女性活躍推進担当として、女性をはじめとした、誰もが働きやすい職場環境の構築や、地域の皆さまに向けて、女性活躍推進の必要性を発信するなど、様々な活動を行っております。一人の女性として働き続けるために、また、職場でステップアップしていく意識醸成のために、男女平等先進国ノルウェー王国ではどのような仕組みや工夫があるのか学び、復興のまちづくりの一助になりたいと思い、今回の研修に参加させていただきました。

ノルウェーでは、女性大臣、女性市議会議員、女性役員や女性管理職の方など様々な職種で活躍されている女性にお会いしました。今でこそノルウェーは男女平等が当たり前となっており、女性の就業率も世界3位ですが、40年前は、性別役割分担意識が強く、女性が活躍する機会は少なかったそうです。たった40年の間に、どのようにして大きく前進する事が出来たのかを聞いてまいりました。

現在ノルウェーでは、2004年に導入されたクオータ制\*により、上場企業における女性管理職数は40%以上となっています。クオータ制とは、ポジティブアクションの一つの手法で、人種や性別に偏りがないように比率を割り当てる制度です。上場企業の取締役の割合の男女どちらかの性別が40%を下回ってはならないという法律を制定すると同時に、どのようにすれば役員や管理職に女性をもっと登用することができるのかを検討し、活躍出来る女性を育成するためのプログラム、

FFP (Female Future Program) が創設されました。FFPとは、日本の経団連に相当する組織が運営しており、女性役員、管理職数を増やすことを目的にリーダーシップ育成を行っています。プログラム受講にあたっては企業からの推薦が必須条件です。1コースは9か月間で行われ、リーダーシップ、会議での対応力・交渉術、コミュニケーション、グループワーク、修了生との会議、交流などで構成されています。プログラム修了者の66%が役員や管理職に登用されているそうです。

実際にこのFFPを受講された修了生の方からお話を伺う機会をいただきました。インドからの移民で、現在IT企業の取締役に就任されている女性です。移民ということで就労の場に就くにも大変な時間がかかり苦労したそうですが、ノルウェーは「平等」という意識が浸透しているため、比較的早期に仕事につくことができ、労働環境も良かったそうです。しかし、昇進していくことには困難がありました。そこで、FFPを受講しリーダーとしての知識を身につけたことにより、仕事では十分な力を発揮し、昇進することができたそ



Female Future Program修了生との懇談(オスロ市)

うです。そして、知識を身につけると同時に、大変重要な資源であるネットワークを得たとのことでした。「プログラム終了後も定期的に懇談の場を設けて、ネットワークを持続している」との言葉が印象的でした。

日本でも、「ネットワーク」「人脈」の重要性は、十分認識されていることかと思えます。しかし、ノルウェーでは、ネットワークを作ることでも終わらず、構築したネットワークを十分に使っていることに感銘を受けました。

ネットワークの使い方について、インスピラという会に所属している方からお話を伺うことができました。インスピラとは、様々な業種の女性が集まって意見交換などをする会です。集まりは定期的に行っており、意見交換会以外にも、外部から講師を招いて話を聞くこともあれば、持ち回りで講師を務めたり、文化関係のイベントを主催することもあるそうです。特に特徴的だと感じたのは、「戦略的ネットワーク」であるということでした。インスピラは現在35名のメンバーで活動を行っており、建築士・生物の博士・警察官・法律の専門家・企業の管理職など、あえて違う分野で働く多様な背景を持つ方々で構成されています。メンバーは多ければよいというわけではなく、今いるメンバーの中で、自分たちに不足している分野、補いたい分野は何かということを考えて募集しているそうです。日本でも、職場内や、同じ趣味など、共通点の多い人同士で繋がることはありますが、インスピラでは、職場や背景が違うメンバーが集まるからこそより強力なネットワークになると考えていました。メンバーには移民の女性もあり、人種を超えてつながるといった積極性が素晴らしいと感じました。あえて、違う分野で働く女性たちが集まることにより、限られた時間で効率よくたくさんのお話を学ぶことができ、また、魅力的な人とのネットワークを構築し、自分を高めていくこともできる貴重な場であると教えていただきました。

今回の派遣研修において、ネットワークは作るだけでなく、その後「どう使うかが重要」とであると実感し、そのネットワークをきっかけに、女性一



女性異業種ネットワーク「インスピラ」のメンバーたち（トロムソ市）

人ひとりが十分に力を発揮していくことを、女性自身が意識していかなければならないと感じました。また、国内外での競争が激化する中、日本でも働く人々の属性や価値観が多様化し、消費者ニーズの多様化も進んでいますので、一人ひとりの違いが不利にならず、持っている能力と可能性をフルに発揮して貢献できるよう、女性の活躍、ダイバーシティを推進していくことが企業の将来の繁栄へつなぐと感じました。

今回の視察研修に参加させていただいて得たことを活かし、今後は、様々なネットワークを「つなぐ」役割を積極的に担っていきたいと思います。

## トロムソ市コーディネーター アンシャスティ・ヨンセンさんからのメッセージ

ノルウェー景観建築協会の支援を受け、これまで2度にわたって日本へのスタディー・ツアーに参加しました。2015年の春、仙台市男女共同参画推進センターで、素敵でたくましい女性たちとのミーティングに参加する機会にも恵まれました。その時のミーティングのテーマは、平等、女性のリーダーシップ、ネットワークの構築などです。男女間の平等および権利という点で、日本にはすべきことがあるように感じました。

そして、2016年の1月、幸運にも、仙台の女性たちをトロムソに迎えることができました。トロムソ訪問のテーマは、ネットワークの構築(ネットワークの構築は女性のリーダーシップを強化する上で重要な手段である)と、女性の視点を反映させた市レベルのまちづくりでした。私は、参加メンバーにとって有益と思われるプログラムをアレンジしました。

### 保育園

トロムソ島にあるブックスプランゲ保育園を訪問し、まだ非常に幼い子ども達(1歳)が平等についていかに学習するか、見識を得ました。

### トロムソ市議会議長

クリスティン・ロイモ市議会執行役に面会しました。執行役からはトロムソのガバナンスおよび女性政治家としての経験に関して説明がありました。また、トロムソの地方政治における女性参画の意義に関する説明もあり、特に、女性執行役としてのモチベーション、困難、やりがいなどにも言及されました。

### DVクライシス・センター

DVクライシス・センター/Church City Missionを訪問し、シェルターとクライシスセンターの活動に関する説明を受けました。

### インスピラ

夕方には、女性ネットワーク団体インスピラとのミーティングを設定しました。インスピラは、ネットワークの目的やミッション、すなわち、女性のコミュニティおよび互いの職業の向上、支援、強化などについて説明しました。学術的な交流についても焦点があてられました。また、視察研修メンバーは震災からの復興に関して仙台が直面する課題について説明しました。このミーティングはノルウェー側の出席者の大きな刺激ともなり、近く、仙台を訪問することを計画している者もいます。

### トロムソ市の都市開発

トロムソ市は市の開発プランを説明し、特に、森林プロジェクト(利用者を中心とする)や、今後予想される成功要因と問題について言及しました。



Ann-Kjersti Johnsen

(アンシャスティ・ヨンセン)さん  
(トロムソ市在住/  
建設コンサルタント会社支店長)

## 北極圏の冬

北極圏の冬の気候や自然を体感したいという要望があり、プレストヴァネに行きました。トロムソ島の上にあるこの湖には、オーロラが見られればという思いで行ったのですが、残念ながらその晩は見ることはできませんでした。

日本の女性の皆さんが、これを機に、またトロムソを訪れたいと感じてくれたらと思います。

男性と同様に、女性は社会の貴重な素晴らしいリソースです。女性が雇用市場に参画することで、ノルウェーは平等と尊重を前提とした福祉国家に発展することができました。社会民主主義においては、全ての社会グループに対して教育が必要であり、福祉によって私たちは自らの未来をつくり上げるのです。福祉国家を維持するためには、十分な数の子ども達がノルウェーに誕生するようにしなければなりません。鍵を握るのは保育園を利用できるかどうかです。女性が家庭の外で働けるようになるには、「全ての子どもに保育園」という発想が必要です。保育園がなければ、女性が労働市場に参画することは不可能です。ノルウェーの多くの保育園は私立ですが、公的な経済支援を受けて運営されています。日本が最初に手をつけるべきことは、「全ての子どもに保育園」をスタートし、保育園設立を始めることだと思います。保育園の効果は絶大です！

また、両親ともに、経済的にデメリットを受けることなく、育児休暇を取得できるようにしなければなりません。ノルウェーで育児休暇を取得する父親の割合は90%です！最も素晴らしい成果は、父親が子ども達と非常に良い関係を築くことができるので、生涯にわたって素晴らしい親子関係を維持できる可能性が高まることです。

保育園と育児休暇に関する権利が確保されれば、世帯あたりに生まれる子どもの数も増加し、同時に、福祉国家を維持することも可能となるでしょう。

しかし、ノルウェーでもあらゆる点で平等が確保されている、と主張するのは難しいところです。国は男女が平等な権利と機会を有するような取り組みを大いに進めています。私たちは、社会に参画し社会を発展させるための機会が与えられています。

皆さまのトロムソ訪問を感謝するとともに、国家間の交流を本当にありがたく思っています。是非、また訪問してください。ありがとうございました！



吹雪の中、トロムソの街中を歩く視察研修メンバー

## スタバングル市コーディネーター 中 英公子さんからのメッセージ

### 縁をつむぐ — 幸せのキーワード

1月、あの凄まじい嵐の中をようこそスタバングルにお越し頂きありがとうございました。皆さまその後いかがお過ごしでしょうか。ガウセル小学校の子どもたちは普段の学校生活を日本のおばさんたちにご見学頂いたことが大きな喜びで、後から「一緒にお弁当を食べながら僕たちの秘密基地の話やクイズ大会で優勝したことも話したかったし、日本の小学校のお話も聴いてみたかったな。おばさんたちともっとゆっくり一緒にいたかったな」と口々に話してくれました。

長い厳しい冬も終わり、あたたかい陽気に満ちた春がスタバングルにもやってきました。仕事帰りに学童保育に立ち寄り、ジャケットも帽子も脱ぎ捨て走り回っている息子たちをやっとつかまえての家路。一斉に芽吹いた白樺の木漏れ日がツマトリソウのカーペットに踊ります。家に着くなり近所の子が遊びにくる。一緒に晩御飯食べてもいい？大急ぎでミートソースを増量。食べたならまた外に飛び出して鬼ごっこの続き。子どもの笑い声とシジュウカラのさえずりがこだまする夕方、ほっと一息つきながらしみじみと思うのです。

ノルウェー政府奨学金給付生としてノルウェーに来て18年。まずはノルウェー語の習得、厳寒地での暮らしの作法から始まり、生活必需の運転免許の取得、アルバイトをしながら一番の目的だったランドスケープアーキテクチャー修士論文を提出。専門職を得て結婚。2人の子どもの出産、育児、義父母の介護と看取り……。人生の一大事に直面しても自分の立ち位置がぶれることなく、勉強も仕事も家庭も大事にしながら続けられるということ、そんな生き方ができる社会を自分も支えているということ、この国に教わり励まされてきました。

「働くってすばらしいでしょう」といつも応援してくれた看護師だった義母は、子どもたちに幼いうちから料理や手仕事を丁寧に教え、子どもたちの成長に合わせながら自宅に近い医療機関に時短勤務、やがて古巣の大学病院に戻り天職だという外科手術室に復帰しました。先に帰宅する子どもたちが用意した夕食を囲みながら、今日の手術はね、と回想し始めるものだから食欲をなくし、進路の選択肢に

医学部はなかったと夫が懐かしそうに我が子たちに話し聞かせています。

我が子たちが学校教育を受けるようになり、自分の幸せな人生を自分でデザインしていくことをゆっくり時間をかけて学ぶ様子からは教えられることばかりです。1月の視察研修プログラムではこのシンプルで懐の深い循環する社会構造に様々な角度からスポットを当てることができたのではないのでしょうか。

また皆さまにお会いできるのを楽しみにしています。



中 英公子(なか えくこ)さん  
(スタバングル市在住/  
建設コンサルタント会社勤務)



ガウセル小学校の裏山からフィヨルドを眺める

## 現地通訳

### 守口 恵子さんからのメッセージ

#### 復興に活躍した女性へのメッセージ

視察にお供する度に、ノルウェーと日本の社会の大きな差に驚かされ、いったいどこから始めたら日本を変えて行けるのだろうかと考えます。

今回のノルウェーへの研修は3回目で最後のグループとなりました。被災して多くの困難に立ち向かいながら、疑問を抱き、行動を起こして復興に寄与してきた女性たちの集まりです。自分で体験して切り開いてきた女性たちは、そのヒントをもう見出しているのではないかと今回感じました。

女性の社会進出度を世界ランキングで比較すると、日本があまりに低くノルウェー人が驚きます。「日本の女性は高学歴なのに、反発せずになぜ昔ながらの『女性は家庭、男性は仕事』という伝統的な考え方に甘んじているのだろう」と。

日本では、主張すべき人が黙っていて苦しんでいても、「和」を重んじると言って、対立を極力避けて異なる意見を抑え込んでいます。主張することは利己主義で、周りから押ししてもらって、初めて本音を言える機会が与えられる。これでは時間がかかり過ぎです。特に日本女性は意見を言わないことが当たり前、という傾向があります。不満に思ってもそれをそのままにしてしまうのです。私もその一人でした。そこに責任があります。受け身では何も変わりません。意見の対立を恐れずに話し合う方法を学びましょう。少しでも共通点を見出してそこに焦点を当てていきましょう。仲間を増やして生きやすい社会に変えていくためには、昔の殻を破って行動を起こさなければ前進できません。

世の中を変えるための一番大きな道具は政治だと思います。誰がやっても同じ、と政治に興味がない人が多すぎます。投票率30%では、国民の意見が反映されているとは言えません。興味のある人だけの独壇場になってしまうのは、あまりにも危険です。まず、超党派で政治家の半数を女性にしましょう。他人に任せていたら、何も変わりません。政策決定をする政治に多くの女性を送り込んで、ネットワークを生かし、分からないところは専門家の助けを得て、連帯の意識をもって、一つ一つ新しく現代に合ったルールを作っていきます。きっと何かが変わってきます。



守口 恵子(もりぐち けいこ)さん  
(オスロ市在住)



---

おわりに

## ノルウェー王国視察研修 最終年に寄せて

---

2012年11月にノルウェー王国と仙台市・せんだい男女共同参画財団が締結した「東日本大震災復興のための女性リーダーシップ基金」は、これまで被災地の女性たちや全国の女性センターなど、防災・復興に取り組む人々の支援となるよう活用してまいりました。

基金のお話をいただいた当初から、ノルウェーから学び、実施したいと考えていたアイディアの一つに、ノルウェーの女性たちとの交流がありました。1970年代まで日本と同じように「男性は外で働き、女性は家庭を守る」という性別役割分担のあった国が、どのようにして世界の男女平等トップクラスの国に変わっていったのか？その理由をもっと知りたいと考えたからです。『百聞は一見に如かず』。すぐに答えが見つからなくても、現地に立ち、風土、文化を感じ、そこで暮らす人々と交流するという体験は、訪れた人に必ず何かを残し、いずれ結びつき、花咲かせる」というのが奥山仙台市長の考えでもありました。

訪問初年度の2014年は、ノルウェー女性参政権100周年にあたり、宮城・福島の大学生たちが、また、ノルウェー憲法制定200周年という節目にあたる次年度は、企業などで働く女性たちが、それぞれのテーマをもってノルウェー各地で訪問・交流を重ねてきました。

そして、今回は前二回と異なる季節、真冬のノルウェーを訪問しました。長い間地平線の下にあった太陽が、ようやく5日前に顔を出したばかりという北極圏の町トロムソから訪問の旅は始まりました。午前10時になっても空は薄暮、午後3時には街灯が灯りだす極夜。融けない雪にまみれ、自然と交わることが日課となっている保育園。プレイルームの中にぶら下がる太陽のモニュメント。日本とは全く異なる自然と共存して暮らす人々。訪問のテーマ「女性、若者が社会参画しやすい仕組み」「人生における再チャレンジが何度でも可能な社会システム」「社会へ影響を与える女性たちのネットワークの意義」を学ぶと共に、日本と全く異なる北欧の自然環境を体感し、ノルウェー理解の視野を広げることも目的の一つでした。

基金の活用期間は今年で終了するため、今回が最後の訪問となりますが、3年の訪問を通して出会った女性たちが異口同音に語ってくれたことが「男女平等への歩みを止めないこと」「考えていることを口に出して伝えること」でした。政治、経済など社会のあらゆる分野に女性が意思決定に参画し、世界トップクラスの男女平等先進国を築いてもなお、その先にまだ平等を希求し続けていること、政治や政策形成が国民・市民の身近な国であるという、知れば知るほど、もっと知りたくなる国、ノルウェーでした。

勝手に想いを巡らします。もし、ノルウェーで大規模な災害が起きたら女性たちは沈黙し、我慢するようなことは決してないだろうと。男女平等の達成度とその社会が持つ防災・復興力は比例すると考えます。2015年3月に仙台で開催された第3回国連防災世界会議で採択された「仙台防災枠組2015-2030」では、「より良い復興」(Build Back Better)が謳われました。「より良く復興する」ために、女性の力は欠かせない、既に日本の女性たちは力を発揮しているのではないかと。さらに、できることは何か、そうしたことを考え続けた3年間の訪問でした。

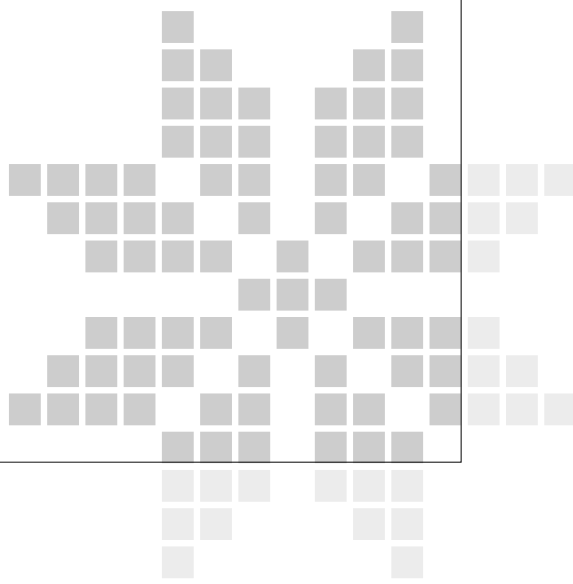
東日本大震災からの復興や防災、男性も女性も持てる力を十分に発揮できる社会づくりのために、多くの方に3冊の報告書を手にとっていただき、共に考え行動する一助としていただければ幸いです。

最後になりましたが、基金の創設はもとより、ノルウェーを訪問するにあたり、お力をお貸しいただいたノルウェー王国、及びノルウェー王国大使館アルネ・ウォルター前大使、アーリン・リーメスタ大使、スノーフリッド・B・エムテルド参事官、仙波亜美広報官に心より御礼申し上げます。みなさまのご支援を得て、より広く深く多くの学びと交流を得ることができたことに重ねて感謝申し上げます。

公益財団法人せんだい男女共同参画財団  
理事長 木須 八重子



# 資料



# 視察研修前後の活動

## 渡航前の活動

### 事前研修会①

オリエンテーション

渡航前準備説明

日時：2015年11月7日(土) 13:00～16:00

会場：エル・ソーラ仙台 サポートルーム

初顔合わせとなったこの日、まずはお互いを知るためのワークから始めました。参加者同士が打ち解けた後、過年度の視察研修に随行した職員がその報告を行い、ノルウェー王国はどのような国なのかイメージを膨らませました。最後に、今回の視察研修の旅行手配業務を担当する(株)インターサポートの浦澤みよ子さんより、「今から準備しておくべきこと」について教わりました。

視察研修に同行する当財団の理事長からは、「復興の過程において、さまざまなフィールドで活躍している女性たちが、ノルウェーで学んだことをそれぞれの現場で生かしていければ、いいまちづくりができる」と、参加者に期待を寄せるメッセージが送られました。



### 事前研修会②

講義：「グロ」が首相になる背景と「グロ」の功績

話し合い：現地学習に向けて

～学びたいこと・伝えたい事の整理

日時：2015年12月12日(土) 13:30～16:30

会場：エル・ソーラ仙台 サポートルーム

前半は、ノルウェーに学ぶ会の木村さち子さんを講師に招き、グロ・ハーレム・ブルントラント元ノルウェー王国首相の功績について、またノルウェー王国の近年の歴史について、お話しいただきました。ノルウェー王国初の女性首相となったグロ・ハーレム・ブルントラントさんは、ノルウェー王国が男女平等先進国となることに大きく貢献された方です。参加者は、グロさんのしなやかなリーダーシップとともに親しみのある人柄に惹きつけられました。

後半は、現地の訪問先で何を学んできたいのか、それぞれがテーマを持って視察研修に臨めるよう、話し合いました。

また、今回の視察研修では、現地市役所のまちづくり担当職員の方々や小学生に、東日本大震災の体験やそこからの復興について伝える機会が予定されていました。自分たちはその機会に何を伝えたいのか、何を伝えなければならないのかについても話し合いました。



## 仙台市長表敬訪問

日時：2016年1月7日(木) 10:00～10:20

会場：仙台市役所 秘書課第一応接室

年が明け、いよいよ出発日も間近となったこの日、奥山恵美子仙台市長を表敬訪問し、視察研修にあたっての抱負をそれぞれの言葉で奥山市長に伝えました。奥山市長は自身の海外視察のエピソードを交えて、「視察先ではさまざまな女性たちとの出会いがあると思うが、大いに意見交換や交流をしていただきたい」と話されました。

参加者は、市長からの温かい激励を受け、視察研修へ向かう気持ちを引き締めていました。



## 事前研修会③

### 渡航前準備説明

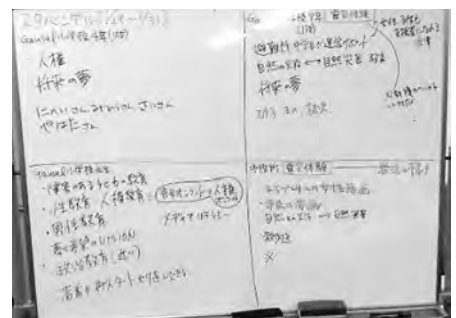
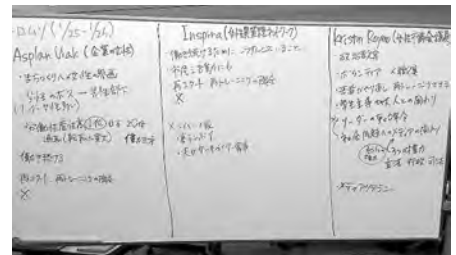
話し合い：現地訪問先での担当確認

日時：2016年1月9日(土) 13:00～16:00

会場：エル・ソーラ仙台 サポートルーム

出発前最後の研修会では、1回目の研修会に続き(株)インターサポートの浦澤みよ子さんより、海外渡航にあたっての注意事項の説明を受け、防寒等の旅支度の最終確認をしました。

また、研修が円滑に行えるよう、2回目の研修に引き続き、視察テーマの話し合いを深めました。最後に、参加者それぞれのフィールドに沿って、訪問先での質問や震災プレゼンテーションの担当を決め、渡航前に各々準備してくることを確認しました。



## 帰国後の活動

### 報告会に向けての打合せ①

日時：2016年2月27日(土) 13:00～16:00

会場：エル・ソーラ仙台 サポートルーム

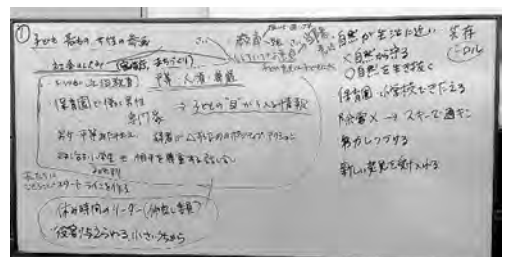
### 報告会に向けての打合せ②

日時：2016年4月9日(土) 17:00～18:00

会場：エル・ソーラ仙台 サポートルーム

帰国後、4月23日に開催する報告会に向け、研修成果のどの部分に重点をおいて報告していくか、意見を出し合いました。

ノルウェーでは多くの事を学びましたが、それぞれの視察テーマに共通の3つのキーワードに沿って報告することを決め、流れを考えていきました。



# 「男女平等先進国ノルウェーから学ぶ ～未来につなぐ復興まちづくり」

日時：2016年4月23日(土) 13:30～16:00

会場：エル・ソーラ仙台 大研修室

<第1部>

基調講演「ノルウェーの暮らしに息づく男女平等」

駐日ノルウェー王国大使館 参事官

スノーフリッド・B・エムテルードさん

<第2部>

ノルウェー王国視察研修2016報告

「未来につなぐ復興まちづくりのキーワード」

ノルウェーについて理解を深め、復興の過程でその学びを活かしていくため、二部構成で実施しました。

第一部では、駐日ノルウェー王国大使館のスノーフリッド・B・エムテルード参事官を招き、基調講演をいただきました。

基調講演の中で、エムテルードさんは、ノルウェーにおける男女平等の主な出来事に触れ、「1970年代のノルウェーは、現在の日本の状況と変わらなかったが、40年後の今日、男女平等先進国となった。自分たちが描きたい未来を自分たちでつくる努力を怠らなければ、日本も必ず近い将来そうなるだろう」とエールを送ってくれました。また、「さらなる男女平等の実現には課題が存在する。私たちはその課題に取り組みなくてはならない」と続けました。なぜ、女性のエンパワーメントは社会のためになるのか、ということについては、「ノルウェーの社会的・経済的発展のために不可欠だから」とし、「国民こそが資源だ」と、力強く話されました。

エムテルードさんは、男女平等がいかに人々の暮らしに根付き、暮らしを豊かにするかについても、個人的な経験を含め、話されました。受講者は、エムテルードさんの気さくな人柄に触れながら、人権を尊重し、家族を大切にするノルウェーの人々の暮らしをイメージすることができました。

第2部は、ノルウェー王国視察研修の報告を行いました。(報告内容は、本文参照)

当日は土曜日の午後にもかかわらず、65名の方にご参加いただきました。



## 【参加者の感想】

- 子どもの頃から「自分の意見を持つ」「対話を大切にす  
る」ということを意識しながら、育っているということ  
に感心しました。又、保育園の環境の良さ、教師、保育  
者の多様性もすばらしいと思いました。(50代女性)
- スノーフリッドさんの講演で印象に残ったことは、男  
女平等の社会を実現するためには、思い切った法整備  
だけではなく、国民の意識改革が大事で、その背景には、  
小さい頃からの教育が大きく影響していることが印象  
的でした。(50代女性)
- 研修報告も大変素晴らしかったです。ネットワークの  
大切さというお話が印象に残りました。(50代女性)
- ノルウェーがLGBTの方への施策を進めていること、男  
女平等の先にある先進性・先駆性を目指して取り組みを  
進めていることを、改めて実感しました。(50代女性)
- 女性も意識を変え、やれることから一歩踏み出す必要  
があると思います。まずは日常の中でやれることを探  
し、生かしていきたいです。(60代女性)
- 女性のやる気・パワーが感じられる会でとても良かった  
です。私も何ができるのか考えてみたいと思いました。  
(60代女性)
- 話し合い、歩み寄りの大切さが印象的でした。ともしれ  
ば救世主を求めてしまいたくなりますが、多様なもの  
があることを知り、認めること、そのために当事者と話  
をすることが大切だと感じました。(40代女性)



## 用語解説

### \*DV

ドメスティック・バイオレンスの略語。配偶者やパートナーなど親しい関係にある(あった)相手から振られる暴力(身体的・精神的・性的・経済的暴力など)のこと。

### \*デートDV

婚姻していない恋人間で起こるDVのこと。

### \*クォータ制

格差を改善するために、必要な範囲内において一定の人数や比率を割り当てる手法のこと。  
クォータ(quota)とは、英語で割当て、分配などをさし、4分の1を意味するクォーター(quarter)とは異なる。

### \*パパ・クォータ制

父親に一定の育児休暇を取得するよう割り当てる制度のこと。

### \*LGBT

セクシュアリティを表すアルファベットの頭文字を綴ったもの。

L：レズビアン(女性同性愛者)、G：ゲイ(男性同性愛者)、B：バイセクシュアル(両性愛者)、T：トランスジェンダー(身体の性と心の性が一致しない者、性同一性障がいを含むこともある)







# 父親の9割 育休取得

## 仙台女性基金ノルウェー訪問記

東日本大震災の復興を担う県内の女性リーダーたちが1月下旬、福祉大を訪問し、地域の女性国ノルウェーを訪ねると、設計事務所のあるマネジャーのアンヒヤスティ・ヨンセンさんが痛感した。「女性活用」を声高に提唱している日本のお寒い現実だ。両国の差を埋めるヒントはどこにあるのだろうか。

「父親が育児休暇を取って、育児に参加しなければ女性が変わりません。ノルウェーでは『パパ・クオータ制』が制度として導入されたことが大きかった。北部の都市トロンムの設計事務所を訪ねると、地域の女性リーダー的存在であるマネジャーのアンヒヤスティ・ヨンセンさんが語った。

耳を傾けたのは県内の女性10人。ノルウェーの支援金を基に、仙台市や、せんだい男女共同参画財団(同市青葉区)が設立した「東日本大震災復興のための女性リーダーシップ基金(ノルウェー基金)」によって派遣されたメンバーだ。

## 制度の意義 社会に浸透

話題に上ったパパ・クオータ制は育休の一定期間を父親に割り当てる制度で、1993年に導入された。子育てをしながら働いているせんだい防災プロジェクトチームの眞野美加さんは「日本で最長49週間、80%給付なら59週間取ることができ、うち10週間は父親だけに割り当てられ、父親が取らなければ権利はなくなるので、約9割の父親は育休を取る。ヨンセンさんの会社に勤める男性社員もほとんどが育休の経験者で、最長の取得期間は44週間。つまり育休期間のほとんどを自身で取得した男性もいる。同時に、日本の実態を嘆いた。子育てをしながら働いているせんだい防災プロジェクトチームの眞野美加さんは「日本では労働効率は重視されず、男性と同じ働き方をしなければ女性に認められない」「父親が育休を取ったら会社が快く思わない」などと口々に説明した。

ヨンセンさんはこう強調した。「誰かが育休を取れば、企業のマネジメントなどにそれなりに影響は出ますが、私たちは誰も文句を言いません。

「だって子どもを産んで育てるのはごく自然な話。それをダメだと言った社会の制度がなぜ必要かという意義が社会に深く浸透している。」

【宇田川恵】



育児休暇について説明する設計事務所マネジャーのアンヒヤスティ・ヨンセンさん(ノルウェー北部のトロンム)で

毎日新聞 2016年2月26日(朝刊)

# 女性役員 財界が養成

## 仙台女性基金ノルウェー訪問記 ⑥

「ノルウェー基金が始まってから3年で素晴らしい成果がありました」。せんたい男女共同参画財団の木須八重子理事長は、ノルウェーの首都オスロにある財界団体、同国商工業連盟(NHO)で、国際労働機関(ILO)が「世界のモデル」と称賛する。講座が生まれる背景には、上場企業に対し取締役の40%を女性にするよう義務づけた「女性の実績プログラム」がある。2003年に法制化され、08年からは、達成できない企業は上場廃止・清算となることになった。

当然、経済界は猛反対したが、その一方で素早く講座を作り、女性の育成に全力を挙げ始めた。講座では、女性たちに自己表現の方法から会議の進め方まで幅広い技術やノウハウを教える。すでに750社以上が1500人以上を参加させ、受講者の約7割が取締役などに昇格した。

仙台の財団はこれに倣い、独自に講座を作って女性管理職を育てる取り組みを昨秋から始めたのだ。現在20人が受講し、未来の仙台を支える人材に育ちつつある。

訪問団は、政府の欧州経済地域・欧州連合担当相、エリザベト・アスパケル氏とも面会した。ア

## 支援受け仙台でも管理職講座

スパケル氏は「仙台は日本のモデルになってほしい」と述べた上で「男女平等が少し進んでも、安心してはいけません」と戒めた。

なぜ、そのようなアドバイスをしたのか。その答えは、視察場所でも多くの女性たちからメンバーに投げ掛けられた言葉にあった。「努力し続けること」。男女平等が定着しても、現状に甘んじず常に努力することが、福祉大国を支えている。

ノルウェー基金は今年9月で終了する。その期限を踏まえ、アスパケル氏は強い口調で語った。

「引き続き対話が続けば本当によろしい」。ノルウェーと仙台との交流で日本に真の女性活躍の土壌が生まれるか。期待が高まる。

【宇田川恵】



アスパケル担当相(右端)と面会し、激励された訪問団のメンバーたち＝ノルウェーのオスロで

毎日新聞 2016年2月27日(朝刊)

# ノルウェー視察 働く女性と交流

仙台

## 参加者、市長に出発報告

男女共同参画のまちづくりの先進地ノルウェーを視察する県内の女性6人が7日、仙台市役所を訪れ、奥山恵美子市長と面会した。一行は行政や経済、子育て分野の関係者ら。24～31日、首都オスロなど3都市の保育園や小学校、市役所を訪ね、働く女性と意見交換する。

奥山市長は、女性の政治参加と男性の育児が盛んな現地の国柄に触れ「日本と違う社会を体感し、今後に生かしてほしい」と激励。宮城野区の南蒲生町内会復興部の二瓶明美さん(51)は「まちづくりのヒントを得たい」と意欲を語った。視察は3回目。市とせんだい男女共同参画財団、ノルウェー外務省でつくる

「東日本大震災復興のため  
の女性リーダーシップ基  
金」を活用している。



出発を前に抱負を語る参加者

河北新報 2016年1月15日(朝刊)

(第3種郵便物認可)

## 男女平等ノルウェーから学ぶ

# 県内視察団が報告会

で  
台月23日  
仙来

県内の女性リーダーによる視察報告会「男女平等先進国ノルウェーから学ぶ」が未来につなぐ復興まちづくり(「せんだい男女共同参画財団主催、駐日ノルウェー大使館協力)が4月23日、仙台市青葉区中央1のエル・ソラ仙台で開催される。女性が参画して決められた政策がまちづくりや人々の生活にどう生かされているかなどを紹介する。

第1部では、同大使館のスノーフリッド・エムテールド参事官が

基調講演。第2部では、視察メンバーらが同国の現状や、東日本震災被災地の復興の課題などを語る。

ノルウェーはスイスの団体「世界経済フォーラム」が公表した2015年版「男女格差報告」の平等度合いで、調査対象145カ国中2位(日本は101位)となった福祉大国。視察団は、仙台市や同財団が同国からの支援金を基に設立した「東日本大震災復興のための女性リーダーシップ基金」が派遣。福祉関連施設や企業、経済団体を訪れ、議論を重ねて女性の視点を生かした

まちづくりの重要性などを学んだ。午後1時半～4時。参加費は無料。先着50人。申し込みはエル・ソラ仙台022・268・8044、またはファクス022・268・8045。ホームページ(<http://www.sendai.jp>)からも申し込みめる。託児(6カ月～小学1年、1人300円、要申し込み)もある。

【宇田川恵】

毎日新聞 2016年3月26日(朝刊)





東日本大震災復興のための女性リーダーシップ基金  
交流・招聘事業  
ノルウェー王国視察研修2016報告書

---

発行日 2016年6月  
編集・発行 公益財団法人せんだい男女共同参画財団  
〒980-6128 仙台市青葉区中央1-3-1 AER29階  
TEL:022-212-1627 FAX:022-212-1628  
<http://www.sendai-l.jp/>